
冬の話

ロボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の話

【Nコード】

N8970P

【作者名】

ロボ

【あらすじ】

ある日、僕をいじめていたやつが中学の屋上から身を投げた。疑いは僕にかかった。僕にできる事は、ただ事件の真相を調べることだけだった…生き残るために。中学校を舞台とした推理小説です。

第一話 日常

今日も昨日と、変わらない一日。

明日も今日と、変わらない一日。

ずっと、そう思っていた。

今日のようにない明日など、考えることもできなかった。

校門をくぐり、昇降口へと向かう。下駄箱には、いつもの通り、唾が吐かれた上履きが一足。僕は小さくため息をついた。

靴を洗ってから、階段を上って教室にたどり着く。教室の中からは、笑いさざめく声が聞こえる。笑い声。今の僕が、忘れてしまったもの。

教室にはいると、みんなの笑い声が止まった。冷たい目とひそひそ声。そしてすぐに生徒たちは自分の仲間との会話に戻る。僕と目を合わせないようにして。

いつからこうなったかは、はっきりとはわからない。理由もわからないけれども、これはずっと、ずっと長い間続いてきた。

やがて始業のベルが鳴り、授業が始まる。授業中でも、安心はできない。何か投げつけられたり、自分の悪口の書かれた紙が回ってきたりする。当てられて答えるときに、いきなり罵声が聞こえてきたりする。

けれども休み時間よりは、ずっとましだ。

休み時間になると、僕はいつもの奴らに呼び出された。毎回毎回、よくまああきないなと思うのだが、こいつらは何かあると僕を呼び出す。そして、理由は何もないのだが、僕を殴る。

彼らにとって、理由はどうでもいいのだ。ただ、殴ってうつぶんを晴らせる相手がいればいい。

けれども、断ることなどできるはずはなかった。

右のストレートが決まって、僕は壁まで吹っ飛んだ。

今僕を吹っ飛ばして満足そうなのが、木田だ。いじめグループのリーダー格で、背が高くて力が強い。成績は中ぐらいだが、人望がある。先生の受けもよい。けれども、自分が一番でないと気がすまないところがあり、自分より劣った者をおとしめる事を好む。

「やっぱりこいつを殴らねえと、一日が始まった気がしねえな」
「全くだな」

木田に追従するかのようになり、みじかくこたえたのが高原だ。クラスでトップの成績で、このグループの頭脳といってもよい。冷酷で、他人のことを虫けらとも思っているようなところがある。

「まだ終わってねえんだよ！」

そういつて、倒れていた僕を踏みにじったのは、唐沢だ。こいつはいつもこうだ。自分からは決して手を出さず、自分より強いやつが相手を痛めつけてから、まるで鬼の首でも取ったかのように騒ぎ立て、相手にとどめを刺す。

うしろにかくれていた佐久間も、その動きに安心したかのように僕を蹴り始めた。佐久間は臆病だ。彼は唐沢の、さらに後ろに回って、なるべく僕の視線からはずれるようにして僕を蹴り続ける。

たぶんこのことがばれたときに、「僕は脅されてやっただけです」とでもいうつもりなのだろう。けれども僕は、彼が実は誰よりも僕をいじめるのに熱心だということを知っている。

しばらく僕は、彼らに殴られ続けた。彼らが僕を殴るのに飽きたのは、休み時間も終わりになってからだった。

あいつらが去ったあと、苦勞して体を起こす。薄汚れた床の代わりに、くすんだ天井が目にはいる。

空の財布。サンドバッグにされる僕。

いつもの、ありふれた光景。

授業に行かなければと思っても、体が動かない。行かなければ、またそれを理由にして、あいつらに殴られることがわかっていない。

少しだけ、袖がまくれていた。そこからのぞく、やけどの痕。何日か前に、たばこの火が押しつけられた、痕。

「なにをしてる！」

突然、大声が響いた。

生徒指導の小平だ。

「授業はどうした、授業は！」

すいません、と謝って、体を起こしたものの、さっきの傷が痛んで、どうしても緩慢な動作になる。

それがまた、小平の逆鱗に触れたらしい。

「職員室まで来い！」というと、有無をいわさない態度で歩き始めた。

職員室というのは、どうしてこう落ち着かないのだろう。僕は小平のお説教を聞き流しながらそんなことを考えていた。

「ひよつとして、なにかあったのか？」

小平が突然そんなことを言った。

「…どうしてですか？」逆に聞き返してみる。

「黒川はまじめだからな。何にも理由もなく授業をさぼるとは考えにくいし」

「…いえ、なにもありません」他にどう答えればよいのだ。

結局、これは反省文を提出することで結論となった。

給食も、いつもの通りだった。料理にはチョークの粉がかかっていて、机は誰からも離されていた。

…そして、放課後。

僕はまた木田達に呼び出されていた。

「おまえ、まさかしゃべってないだろうな」開口一番、そういわれた。

「ああ」と答えたが、とたんに肩をこづかれる。

「じゃあなんで職員室なんかから出てきたんだ？」

「先生に職員室へ呼び出されたんだ」僕は弁解した。

そうしながら、何で弁解なんかしなくちゃならないんだろうと思ひ、卑屈に反応する自分に腹が立つ。まして、こうしたところで状況がかわるはずもないのに。

「言い訳なんかするな」高原が、冷たい、しかも自分が楽しんでゐる事がはつきりとわかるような声で決めつけ、僕の顔に唾を吐いた。「どうなるかわかっててやったんだろうな」

その声を合図に、再び僕は殴られた。四人に繰り返し繰り返し。僕は体を丸め、声も出せないまま、ただ殴られ続けた。

「反省が必要だな」木田の声に、他の三人も頷く。

「でも、どうするんだ？」佐久間の声に、高原が答える。

「こつするのさ」

というと、高原は僕を窓際へと連れていき、下を確認してから、僕の足首をつかんだ。

下は校舎の裏側になる。さび付いた空き缶やガラスが散乱しているそこに、人の姿はない。

一瞬、なにが起きたのかわからなかった。突然、目の前にアスファルトが迫る。

高原が僕の足首をつかんだまま、窓の外へ僕を放り出したのだ。悲鳴が上がった。それが僕の口からでたものだといふのに、少しかかった。

逆さまの世界が、右に左に大きく揺れる。

僕は叫び続け、それを聞いてあいつらは腹を抱えて笑った。

「大丈夫だつて、手なんか…おっと、すべった」
高原が、左足を離れたのだ。さらに地面が迫り、大きく世界が揺れる。

「は、早くあげてくれ！」
必死になって哀願する。

ふいに、体が軽くなつた。やっとあいつらが僕を引き上げたのだ。何か言おうとしたが、声にならない。自分の顔が、涙と興奮でぐしゃぐしゃになっているのがわかる。それを見て、またあいつらは笑う。

「これでわかつたよな、逆らつたらどうなるか」

木田の言葉に、頷くしかない。すると、また殴られた。

「ちゃんと言え！」

唐沢の言葉に、僕はつぶやく。

「わかりました。二度とこんなことはしません」

「声が小さいぞ！」今度は佐久間だ。

そしてこのあとも、どうということもない理由を付けて、僕は殴られ続けた。

四人が僕を殴るのに飽きた頃には、日も沈みかけていた。

四人は帰った。僕は何とか体を起こし、教室の空いている席へ腰を下ろした。歩きたびに傷が痛んだが、このまま教室の床に倒れていたら、また朝と同じことになる。だから椅子に座った。怪しまれないように本を開く。けれど、本の中身など頭にはいるはずはなかった。

日は傾いている。教室には誰もいない。けれども、帰りたくはなかった。あいつらが、もし途中で待ち伏せでもしていたら。

いつそのこと、家に帰らないでいようか…。

そんな考えが浮かんだが、すぐにふりはらった。

もし家に帰らなければ、親は当然不審を抱く。警察に届け出るか

もしれない。警察は学校を捜査し、学校にいる僕を見つける。僕は理由を聞かれる。そして僕が話そうと話すまいと、彼らは口実を見つけ、また僕をいじめるだろう。

下校の音楽が鳴り始めた。校内に残っていたわずかな生徒たちが帰り始める、そのざわめきが聞こえ始めた。

…もう潮時かな。

僕はそうひとりごちると、帰り支度を始めた。

なるべく彼らに出くわさないようにして家にたどりつく。どうやら彼らは待ち伏せしてはいなかったらしい。僕はほつと安堵のため息をついた。けれども考えてみると、彼らにとって僕は、わざわざそこまでしていじめる相手ではないのだろう。彼らにとっては、僕はただのおもちやに過ぎないのだろう。街角で売っているような、安物のしゃべるおもちゃ。こわれても、なんの後悔もなく捨てられ、そしてまた新しい物が買われていくような。

階段を上り、部屋へと転げ込む。荷物を放り出して、ベッドに倒れ込んだ。目の前に黒いシェードがおりる。世界と一瞬だけ切り離されたような感覚。そのまま立ち上がる気にはなれず、窓から目に映る夕暮れの光景を、ぼんやりとみていた。

窓の外の光景は、赤から徐々に深みを増していく。そしてそれは茜色から堇色へ、そして深い藍色へと変じていった。

やがて空は昼の名残を完全に消し去り、それにとまって部屋は闇へと覆われていった。カーテンを閉めると、そこには全き闇が訪れた。

部屋の隅にうずくまり、闇を見つめていると、安らぐ自分がいるのがわかる。暗闇は、僕は好きだ。すべてのものを、無慈悲に、あたたく包み込む闇が…。

明かりをつけて、机から一枚の紙を取り出す。

その紙には、これまでのいきさつや、僕をいじめた奴らの名前等が書き込まれている。僕はそれに何か書き込もうとしたが、何もなかった。耐えられないような状況になったら、これを証拠として新聞やテレビに送るつもりだった。

その隣には、白い封筒。僕はこれを遺書にするつもりだった。もともと、いつ使うようになるかはわからない。ひょっとしたら明日かもしれないし、もしも僕が耐えきることができれば、これは半年ぐらいあとに使うことになるかもしれないかった。

使わないなんて事は、考えることもできなかった。

これが公になるようなことになったら、彼らは裁かれる。世論やマスコミによって、今僕が受けているのよりずっとひどいめにあうのだ。

僕はそれを思い浮かべて、暗い笑みを漏らした。そうなれば、彼らも僕に大してしたことのひとつさを知るだろう。これは復讐なんだ。僕をいじめた奴らへの…。

そう思うと、少しは心に余裕ができて…。

そして、落ち込んだ。

僕は何をしてるんだろう？ いじめている奴らに立ち向かいもせず、死んだあとのことを考えて、かろうじて生きながらえている…。そうして僕は考える。ひょっとして、これは当然なんじゃないか？ 僕には、何かいじめられても仕方ないところがあるんじゃないか？ 少なくとも…。

今の僕と友達になりたい人が、はたしているだろうか？

第二話 屋上

カーテンを開けると、弱々しい冬の光が射し込んできた。低いところでぐずぐずしている太陽は、冷たくときすまされた空気を暖めることができずに所在なげにたたずんでいた。

さわやかというには、寒すぎる朝だった。

学校へなんか、行きたくなかった。けれど行かなければ、家に嫌がらせがくることはわかりきっていたし、そもそもこんな事で休みたくはなかった。ここで学校を休んだとしても、彼らを喜ばせるだけだ。

急いで着替えを済ませ、家を飛び出した。

この時間なら、彼らはまだ学校へきてはいないはずだ。せめて登校するときだけでも、彼らから離れていたかった。

それに、朝の学校は結構好きだった。誰もいない教室の窓から、ようやく目を覚ました太陽の光がさしこんできて、教室の机や椅子や、ちらちらと光りながら舞い狂う埃をじつと見ている、その瞬間が。

そういったとき、僕は少しだけ今を忘れることができる。彼らも、そばで見ているだけのやつもない。

教室のドアをあけると、予想通り彼らの姿はなかった。僕は誰もいない教室を堪能し、しばらくぼうつとしていた。けれども、そうしているうちに、僕は忘れていたかったことをまた思い出してしまった。

もうすぐ、彼らがやってくる。昨日のことについて文句を言い、そしてまた昨日と同じ事が繰り返される。それはわかっていたけれども、だからこそそこにはいたくなかった。せめて朝のうちだけ

でも、それからのがれていたかった。

僕は屋上へと行くことにした。この学校の屋上は、入口に頑丈な鍵がかかっていて、普段は生徒の立ち入りのできないようになっていた。柵は老朽化しているし、そもそもひとが立ち入りできるようにはできていないのだという。

けれども、僕は鍵を持っていた。前にクラスの行事で屋上の鍵を借りてきたとき、こっそりと合い鍵をつくっておいたのだ。このころすでにクラスで孤立していた僕にとって、これはどうしても必要な物だった。

そしてこの合い鍵をつくって以来、屋上は僕の唯一の居場所になった。なにかあったとき、ひとりになりたいとき、僕はいつもここにいた。あまり頻繁に使うと、木田たちに感づかれてしまうので、そのおそれのない時にしか使うことはできなかったけれども。

古ぼけた階段を登りきると、そこに屋上への入口があった。鍵を差し込み、回すと、どつとあふれてくる光のむこうに、誰もいない小さな場所があるはずだった。

でも、そこは思った通りの場所ではなかった。射し込んでくる光の向こうに、小さな人影が見えたのだ。

… いったい、だれが…？

そう思いながら足を踏み出したとき、光がやってきてその人影を照らした。人影は光をはらんで、一瞬見えなくなり、ただ輪郭だけが金の糸でもふちどられているかのように輝いていた。

目が光にようやくなれると、その人影もようやくだれだかわかる程度になった。

有坂優樹だ。

有坂は同じクラスの女の子だ。クラスでも、僕と同じようにかた

すみでひっそりとしていることが多い。おとなしくて、めだたない女の子だ。ただ、最近は何人かと連んでいることが多い。それは決してよいことではなかった。

有坂も、いじめのターゲットになってしまったのだ。

こちらのほうは、主に女子が中心となっている。休み時間、彼女が女子のグループに呼び出されてどこかにつれていかれるのを、何度か見たことがあった。

そういうときの有坂は、いつも決まって無表情で、まるでこれからおこることを受け入れてしまっているように、すべてをあきらめてしまっているかのように見えた。僕は、彼女はそういう表情しかできないんじゃないかと思っていた。

けれど、今僕が見ている有坂は、いつものそんな彼女とはまるで別人のように見えた。彼女は柵に腕を乗せて、ただぼうつと空の方を見つめていた。顔には落ち着いた、そして満ち足りた表情を浮かべ、その表情を見て僕は、彼女が空を見ていた訳ではないことが分かった。

彼女は…。

「誰!？」

突然、有坂が叫んだ。どうやら、気づかれたらしい。

「ごめん。驚かせちゃったみたいだ」

「黒川くん?なんで、こんなところにいるの?」

そう聞いた彼女の顔には、紛れもない怯えの表情が浮かんでいた。「鍵が開いてたんだ。それで、ちよつとよってみたんだ」

「嘘!鍵なんかあけたままにしておく訳がないじゃない!絶対に閉めたわ!」

彼女の声は悲鳴に近かった。

どうやら、ごまかしてはいけなときらしい。僕はポケットからこの合い鍵を取り出した。

「作ったんだよ、合い鍵」

「どうして、そんなものを？」

「…たぶん、有坂さんと同じ理由だと思う」

「あたし？あたしはべつに…」

「じゃあ、何でこんなところに入れたの？」この問いに、彼女は明らかにうろたえた。

「たまたま鍵があいてたから…」

「うそはやめようよ」というと、彼女はうつむいた。

「…どうして、わかったの？」

「ずいぶんここになじんでるように見えたんだ。初めてには、とても見えない」

彼女がさつき見ていたものは、この空のその向こう。誰もいない世界。

「そう…」とだけ言うと、彼女は歩き出した。

「どこへいくの？」

「教室に帰るの」

「…僕のせい、か」

彼女は答えず、そのまま歩き出した。

「待った！」思わず、呼び止めていた。

「なに？」無表情な顔。いつもの、有坂の顔。

「僕が帰るよ。先にいたのは有坂さんだしね。…それから、」
すこしためらったが、続けて言う。

「ここで見たことは忘れる。なんなら鍵をあげてもいいよ。僕はもう、来ないと思うから」

「どうして？」

「どうしてって、有坂さんに悪いよ。せっかくここでのんびりして

るんだ。人の居場所に土足ではいるもんじゃないし」ポケットから鍵を取り出し、有坂に渡す。

「ぼくがさつきここにきたとき、有坂さんがすごくおこってるようにみえたけど、あれは、ぼくっていう邪魔者が、この場所にきたからだろ？有坂さんが唯一息ができるこの場所を、めっちゃめっちゃにしてみようと思ったからじゃないか？」

自分一人の宝箱。そこに他人がいれば、誰だって腹が立つ。もし有坂と僕の立場が逆だったら、僕は間違いなく腹を立てていたはずだ。

「じゃあね。じゃまして悪かった」

そういつてきびすをかえす。たったひとつの居場所がなくなるのはつらかったけれど、それでも有坂からここを取り上げる気にはならなかった。

ドアの前まできたとき、後ろからそでをつかまれる。

「やっぱり、この鍵は返すよ」有坂が、手のひらに鍵を載せて差し出していた。

「だって、ここは黒川君も使ってたんでしょ？ここでしか息ができないのは、黒川君もそうなんじゃないの？」

「だからって、人から居場所を取り上げる趣味はないんだ。それじゃ、あいつらと同じになっちゃうし」

「同じところをほかのひとと使うからって、居場所にならないとは限らないよ」

有坂はそういつて、僕に鍵を握らせる。

「結局鍵は二人とも持つてるんだし、お互いのじゃまをしなければ、別に黒川君がいてもいいよ」

嘘だ、と思った。少なくとも僕は、自分の居場所に人は絶対はいってきてほしくなかった。一人きりでいられる場所。それが、僕ら

には絶対に必要だった。

けれど、だからこそ有坂がそこで譲ってくれると聞いたとき、ぼくはともうれしくなった。有坂は、ぼくの立場をわかってくれている。ぼくがここを譲ると言ったときどんな気分だったかも、たぶんわかってるのだろう。でなかったら、これまで通りここを使っていたらいいだけなのだから。

「いいの？」だから、ぼくはそう尋ねた。

「うん。わたしがとかくいうことじゃないしね」というと、彼女はまた空に意識をとばし始めた。

唇のあたりが、少しだけゆるんでいる。それを見てぼくは、彼女が完全に呆然としているのではないことを知った。

照れていたのだ、彼女は。だれかにいいことをしてやれた自分にそれに気づいて、ぼくも少し頬をほころばせた。

自分がずいぶん久しぶりに笑ったと気づいたのは、少し経ってからだった。

ぼくたちは、とてもよく似ていた。似たような苦しみを抱えて、同じ場所でわずかにいやされていた。

けれど、他人のこないこの場所に、もし似たような人がきたら、そして苦しみを分かち合ってくれたら。私にもやっぱりこの世界にいる場所はあるのだと、気づかせてくれたら。自分はいらない人間じゃないと、もし思うことができれば。それはなんてすばらしいことなんだろう。

たとえそれが錯覚であつたとしても。

…僕は学校へ行くことが、次第に楽しくなり始めていた。

学校では、いじめは相変わらず続いている。クラスで僕と言葉を交わす者も、やはりだれもない。

それでも屋上のドアを開けると、彼女がほほえんでくれていて、そこで僕たちは、昼食を食べながら、流れる雲を見ながら、おしゃ

べりをくりかえした。

話したいことは、きりもなくあった。授業のこと、おもしろかったテレビ、身近にあった小さな事柄。そういったささいなことを、僕らはいつまでも話し合った。こういった「普通の学生」らしいことをするのは久しぶりだっただけに、それはとてつもなく新鮮で、どうしようもないくらい楽しいことだった。

たまにいじめの話になることもあったけれど、やがてその話はお互いにさけるようになった。どちらも、相手にはどうすることもできないことなのだ。ここでやっと手に入れた、静かで落ち着いた、宝石のような空間。それを壊したくはなかった。

そして今日も、屋上のドアを開けると有坂がいる。

血のにじんだ僕の顔を見て、有坂が心配そうな顔をする。

「大丈夫？」

「別に。いつものことだから」そう強がって、有坂を見る。なんだか、元気がない。少し制服が汚れている。

「なにかあったの？」

「ううん、なんでもないの」

「そう」何かあったことくらいは、見ればすぐわかった。でも、何も言わない。

そのまま、お互い黙って空を見上げる。

「黒川君は、季節ならいつが好きなの？」唐突に、有坂に聞かれた。

「有坂は？」

「私は冬がいいわ。それも、雪がすごく積もって、何も見えなくなるくらいの日がいい。どっちを向いても、ただ白しかなくて、その中に埋もれて、凍るの。わたしだけじゃない、虫も鳥も森もひとみんな凍って、ひとりぼっちになるの。物音ひとつしない、何もか

も覆い尽くされた中で、眠るの」

そういうと、有坂は寂しげに笑った。

「黒川君はどうなの？」

「僕？僕は夏だな。夏は、みんなにぎやかだから。鳥はなくし、蝉はうるさいし、海や山にも人がたくさん来る。みんな楽しそうで、この世に悩みなんかないような顔をしてて。夜にはお祭りで、幸せそうな顔をした人がどつと町に繰り出す…」

「そんなの、どこがいいの？私たちには関係ないじゃない！」

「それでもさ、人から生き物から自然まで、なにもかも生き生きしてるから。あれを見ると、ひよっとしたらこの世はそんなに捨てたものじゃないんじゃないかって。ひよっとしたら、僕はこの世にいてもいいんじゃないかって、そう思えるから」

そのまま二人で空を眺めた。

冬だというのに雲一つない、穏やかな、平和な青空が広がっていた。

夢のような時間が過ぎていった。つい話し込んで、日が暮れかかることもあった。下校の音楽のかかる頃になると、かけていた屋上の鍵を開けて、誰もいないことを確かめてから二人で降りていく。そんなとき、隣の有坂を見ながら、僕はいいようなもない幸福感を覚えていた。

…けれども、夢はいつか醒めるものだ。

第三話 喪失

雨が二、三日降り続いたあとの、ある日のことだった。

僕は久しぶりに屋上へと向かった。ここ二、三日は彼らのいじめもなく、本当に久方ぶりに、まったく平穏な気分を味わっていた。このまま、すべてがうまくいくような、そんな気さえしていたのだ。そしてその気分のまま、僕は屋上のドアを開けようとした。

しかしそこで、僕は異変に気づいた。鍵が開いていたのだ。彼女があけたのか？いや、彼女も慎重で、こういったところには必ず鍵をかけている。とすると…

考えている暇はなかった。いきなり大きく開いたドアから、太い手が伸びてきて、僕は引つ張り込まれてしまったのだ。

そして僕は、ここでもっとも見たくないものを見た。それは、この場所を、もはやこの世で唯一の僕の居場所を、根こそぎ壊してしまふものだった。

「よう、遅かったな」

木田が、いつもと変わらない笑顔で立っていた。

「もう、みんなそろってるぜ」

あたりを見ると、高原も唐沢も佐久間もいた。

「どうして、ここが…？」

自分の声が震えているのがわかる。

「おまえ、最近つきあい悪いからな。佐久間に言っただけで後をつけさせただ。昼や放課後に、どこに逃げるのかをな」

僕は2、3日前のことを思い出していた。そのときまでは、彼らにこのことを気づかれないように、ここにくる前に必ずどこか別

の場所に寄って、誰もいないのを確かめてから屋上へと向かっていった。けれどあの時は、最近いじめがないことに気がゆるんでいて、そのまま上へと向かってしまった。つけられたとすれば、たぶんそのときだ。

「なかなかおもしろいところを見つけたな。ここだったら、おまえが泣こうが叫ぼうが誰にもわからない。思う存分、おまえと遊べるな」

木田が笑う。それにつられて、残りの三人も笑った。それは、いつものあの笑いだった。

いったい何発殴られたのか、もうわからない。

木田のストリートをくらって倒れたあと、みぞおちにけりを入れられ、頭を思い切り踏まれたことまでは覚えている。そのあとは四人入り乱れて、ただひたすら僕を殴り、蹴り続けた。

やがて佐久間がかがみこみ、僕のポケットの中から財布を抜き取った。その財布のとなりから、銀色の見慣れた鍵が転がり落ちてきた。「おい、これなんだ？」木田の怪訝そうな声に、僕は答えない。しかし高原が、これが何であるか気がついた。

「屋上の合い鍵か。こんなもんまでつくってたとはねえ」高原に嘲笑されて、僕は怒りで目がくらみそうになった。

これが必要なまでにしたのは、いったい誰なんだ。これがなければやっていけないまでにしたのは、いったい誰なんだよ！

僕はそう怒鳴りたかった。けれど、それを言ったところでどうなるといふのだろ。こいつらを喜ばせるだけだ。

「俺たちのためにこんなもんまで作ってくれてありがとう。お礼に、いつでも遊んでやるからな」

僕の怒りになど目もくれず、赤ん坊でもあやすような気味の悪い声で、木田が言った。

その声を聞きながら、僕は思った。

もう二度と、宝箱は僕の手には戻らないのだと。

冬の早い夕暮れが、もうそこまできている。帰る気力もないが、引きずるようにして体を進めていく。

有坂はまだ、あの屋上で僕を待って、寒気に身をさらしているのだろうか？それを知りたかったが、僕にはもう確かめるすべがない。屋上のそばまで行つて、彼女に声をかけようかとも思ったが、やめた。ペントハウスは声が響くし、もしそれを彼女をいじめている連中にまで気づかれたら、彼女にまで迷惑がかかる。それだけはさけたかった。でも…

（…待てよ）

思考の網に、なにかが引っかかった。昼休みの、木田のあの一言だ。（佐久間に言つて、後をつけさせた）

あの執念深い佐久間が、僕がペントハウスに上がっていくのを見ただけで、引き返してくるはずがない。屋上まで行つて、ドアの向こうで僕が何をしているか、誰と話しているかも調べたはずだ。とすると…

（有坂…！！）

僕は走り出した。今まで歩いていたのとは正反対の、校舎の方へ。たぶん、僕の人生でこれほどまでに焦ったことはなかっただろう。上履きも履かずに階段を駆け上がる。途中で女子の一団をやり過ぎた。有坂をいじめていたやつらだ。僕はますます焦った。

屋上のドアは開いていた。勢いよくドアを開けると、そこには傷だらけになった有坂が転がっていた。目はぼんやりとして、なにも映していないように見える。

「有坂、有坂っ！しっかりしろ！！」

僕があわてて抱き起こすと、有坂は目をやっと動かして、声の主の方を見た。それから、すぐにその目に涙が膨らんでいくのが見えた。

「なくなっちゃった、なんにもなくなっちゃったよ…」

そう、何度も繰り返しながら泣きじゃくる彼女。僕は少しためらってから、有坂を抱きしめた。それ以外に、なにもしてやれることがなかったから。

「ごめん。僕が不注意だったから…」

彼女はそれには答えずに、ただ泣き続けていた。

彼女が完全に泣きやむ頃には、すでに日はとっぷりと暮れていた。真っ暗な夜道を、二人でとぼとぼと歩く。

「もう、これからはあえないな」

「そうね…」

憔悴しきった顔で、有坂が頷く。

「でも、どこかにまた別のいい場所はないかな？」

「ないと思うよ。それに、今度のことで、あいつらもこういう場所があるということを知ってしまったから。僕らがいなくなったら、すぐに探し出すと思うよ」

「それでも…」

まだなにか言いかけようとする有坂を制して、僕は言う。

「もう、会わない方がいいと思うんだ」

言わなければならぬ、そしてもっとも言いたくなかった一言を。

「…どうして？」

僕と一緒にいると、有坂に迷惑がかかるから。今日のことでもわかっただろう？僕は結局、有坂を困らせるばかりなんだ。有坂は、ずっと僕のそばにいてくれた。僕がまだ死んでいないのは、彼女のおかげだ。だから、なんとしても彼女は守らなければ。でも、これを言くと彼女はきっと「そんなことないよ」と言うだろう。笑って言うか、怒って言うかはわからないけれど。

だから僕は無言で歩き出す。ふりかえりもせずに。彼女がどんな顔

をしているか、だいたいわかるから。たぶん泣きそうな顔で、なにごおこったのかわからずに、呆然としているだろうから。それでいい。

これ以上、巻き込みたくないから。

後ろで、有坂のすすり泣く声が聞こえた。

第四話 事件

朝、僕は寝不足のまま目を覚ました。頭に鉛でも入っているようだ。有坂の、あの泣き声が頭から離れない。今も目を閉じると、有坂の悄然とした姿が浮かぶ。ぼくはそれを、ほんの少しさえも見ることはなかったのに。

あれから、三日が経っていた。有坂は学校を休んでいた。僕はまた、いつもと変わらない生活に戻っていた。

時計を見る。七時ちょうど。もうそろそろ起きないとまずい。のそのそと動き出し、なんとか服を着る。

下に降りると、めずらしく父さんがいた。新聞を片手に、コーヒを飲んでいる。

「おはよう、父さん」

「ああ…」

いいかけて、父さんが僕の顔を心配そうに見た。

「だいじょうぶか、耕平？ ひどい顔色だぞ？」

「そうかな、べつになんともないけど」

「そうか？ そうは見えないけど」

「私もそう思う」母さんが、これも心配そうな顔で続ける。

「今日は休んだら、学校？」

「だいじょうぶだよ。そうそう学校休むわけにも行かないし。なんとかなるって」

「そう…」

母さんが、納得していない顔でうなづく。

僕は急いで朝食を平らげると、すぐに出ていった。

家からだいぶ離れてから、僕はほっと息を吐いた。

最近、父さんたちがなにか感づいているようだ。むりもない。毎日

沈んだ顔で出ていく息子の顔を見れば、なにかあったということはすぐにわかるだろう。

正直、父さんや母さんにうち明けようと何度思ったことだろう。父さんも母さんもわるいひとじゃない。うちあければ、学校と談判もしてくれるだろうし、うちの先生の質は悪くないから、ひよつとしたらいじめ対策がとられるかもしれない。

けどだめなんだ。先生は教室を支配しているわけじゃない。先生は、ただ教室にいて、授業とホームルームをするだけ。いくらいい先生でも、結局生徒に影響力があるわけじゃない。生徒のことは、生徒同士で決めること。僕らの間では、それは暗黙の了解だった。もし先生や親に話して、対策がとられたとしても、その後でなにが起ころう？子供の世界に大人を引っ張り込んで、大人の力で解決したところで、みんながどう思う？「チクリ魔」のやつと、ほんとうに仲良くしてくれるだろうか？

無理だ。それはほんとうの解決にならない。大人の目の届かないところで、またおなじことが繰り返されるだけ。もっと多くの人が加わり、もっと陰湿になつて。

これは、自分の力でなんとかしなければならぬのだ。けれど、いったいどうすればいい？どうすれば、ここから抜け出すことができる？そんなことが、ほんとうにできるのか？

そのまえに…

それまで、僕が保つだろうか？

そして、痛切に思った。もし、仲間がいれば。仲間じゃなくてもいい、おまえはここにいていいのだと、言ってくれるひとさえいれば。

そうすれば、僕は生きていられる。なんとか耐えていけると思う。もし、そんなひとさえいれば…

僕はふいに、笑みを漏らした。くちびるのはしに、あるかなしかの暗い笑みを。

いたじゃないか、そういうひとが。過去形で言わなければならないのが残念だけど。

有坂は、もう僕のそばにはこないだろう。当然だ。あたりまえだよ、僕が拒んだんだから。

彼女は僕が拒んだ訳をわかっているだろうか？僕が彼女に迷惑しかかけないだろうと言うことに、気づいただろうか？

たぶん、気づいてはいないだろう。気づかないでいてほしい。有坂、優しいから。気づいたら、彼女のことだ、僕のそばにきて、ずっといっしょにいてくれるだろうから。たとえ、僕がこれ以上迷惑をかけたとしても。

だから、これでいい。

耐えるのは僕一人でもいい。

有坂を巻き込むなんて、耐えられない。

けれど、少しだけ、気づいてくれればと思ってる。それは無理だと、それは甘えだと、わかってはいるけれど。

わかつてはいるけれども…

今日は木田たちの姿が見えない。めずらしいこともあるものだ。

とはいえ、どこかでまた待ち伏せでもしているかもしれない。

そう思いながら歩くうちに、学校が見えてきた。けれど、どこかおかしい。門の前には、パトカーが何台か。そのとなりには、車が鈴なりになっている。そしてまわりには、カメラを抱え、マイクを持ち、忙しげに働く人々。

なにかあったんだ。僕は足を早め、校門をくぐった。

校門の先には、ひとだかりがしていた。いそがしく立ち働く警官に、そのまわりにどやどやと集う、制服姿の野次馬たち。校庭の一

角にロープが張られ、なにかが起こった場所を示していた。

僕は野次馬の一人を捕まえて、聞いた。

「なにがあつたんだ？」

「飛び降りだよ、飛び降り自殺！」興奮した声で彼は言った。

飛び降り自殺か。たぶんそいつもつらかつたんだろうな。わざわざ学校で飛び降りたと言うことは、学校そのものか、あるいはこの学校の生徒に抗議するつもりだったのかもしれない。

僕がこの次飛び降りたら、マスコミは大きく取り扱ってくれるかもしれない。なにしろ、中学生が連続して飛び降りるのだから。そして大きく取り扱ってくれるほど、木田たちは追い込まれていく。そんなことを考えている自分に気づいて、僕は身震いをした。おそらくは罪もないまま死んでいった自殺者。その死体の前にいるのに、その目の前でそんなことを考えていた。何となく冒涇のような気がして、僕はその考えを頭から振り払おうとした。

「だれが飛び降りたんだ？」

その質問は当然で、ごく普通のものだった。しかしこの答えは、決して普通の、僕の予想できる答えではなかった。

「1年3組の…確か木田とか言うやつらしい」

「木田が？」

どうして、木田が？他のやつならともかく、木田が自殺だって？どうなってるんだ、いったい？

ほんとうに木田か…？

僕は野次馬をかき分け、ロープにたどり着いた。

そこで見えたものは、白いチョークでかかれた人型に、紅くしぶいた血の残り。死体はすでにどこかへ運ばれたらしく、妙な格好で踊っているように見える人型のまわりを、捜査員たちがばたばたと動き回っていた。

知り合いの姿を見つけ、声をかける。

「木田が飛び降りたって、ほんとうか？」

「ああ…」と言って振り向いたそいつの顔が、一瞬でこわばった。

ああ、そういうことか。僕の顔もこわばる。彼とは、たぶん違った理由で。

「…どうやらほんとうらしいな」

それだけ言って歩き出す。

あいつの顔がこわばったのは、木田がほんとうに死んでいるから。そして、木田を殺したのが、僕だと思っているから。

考えてみれば当然かもしれない。木田が殺されたのか、それとも自分で空を飛んだのか。それがわからない以上、木田が誰かに殺されたとすれば、一番疑わしいのは僕だ。僕自身、そう思う。

とすると、僕は捕まってしまうのだろうか？ やってもいない事件のせいで。それも、木田なんかのせいで？

そんなことはないだろう。もしこれが他殺だったら、警察が必死になって捜査するはずだ。とすれば、僕がやってないことはすぐにわかるだろう。何しろ、彼らはプロなんだから。

けれども、新聞なんかではよく冤罪のニュースを耳にする。警察も万能というわけじゃない。もし、僕が疑われたりしたら…

僕が考えていると、横から何かの記者らしい人に声をかけられた。

「殺された木田君って、どんな子だった？」

どんな子、といわれても、思ったことを言うわけにいかないじゃないか。

「そうですね、まじめで明るい子でした」当たり前障りと誠意のない答え。

「昨日会ったときも、特に変な様子はなかったですし」

この何気ない答えに、彼は色めき立った。

「昨日の彼の様子について、もっと詳しく聞かせてくれないかな」
彼の必死な様子に、しかし僕はたじろいだ。

「もうすぐ授業なんで」と去ろうとしたところで、彼に名刺を渡され、「何か思いだしたことがあったら、個々にすぐに連絡してほしい」と言われた。

正直勝手だと思った。捨てようと思ったが、名刺なんて初めてみるので、しばらくためつすがめつしてからポケットへと入れた。

僕が入ると、教室の空気が変わる。それはいつものことだったけれど、今日は極め付きだった。

僕が来るまではにぎやかだった教室が、完全に静まり返った。誰も僕の方を見ようとせず、ただ敵意と軽蔑の雰囲気だけが、しよう気のようにたちのぼっていた。

まあ、ある程度予想していたことだ。とはいっても、やはり応える。

有坂は来ていない。昨日のことが、まだショックなのだろう。胸が痛んだが、無理矢理押さえつけた。

そして罪悪感から逃れるために、有坂が今すぐにでもドアから入ってくることを想像した。

けれど、有坂は始業のベルが鳴っても姿を現さなかった。

「みんなはもう知ってると思うが、きのう木田が飛び降り自殺をした」

やってきた担任の倉本の説明に、みんなが一斉に質問を始めた。

「木田は、ほんとうに自殺だったんですか？」

内海というクラスメイトが、疑問を顔いっぱい浮かべて尋ねた。

「遺書があったそうだ」

倉本の短い説明に、クラスはいっそうざわめいた。

「遺書には、なんて書いてあったんですか？」

三浦というやつがした。

「『みんな、ごめんなさい。さようなら』だそうだ」
クラスのざわめきは、さらに大きくなった。

「警察はなんて言ってるんですか？」唐沢の声がする。

「警察は自殺だと断定した。遺書と靴も見つかったし、特に不審な点もないらしいからな」

「俺には、木田が自殺したとは思えません。自殺する理由がないじゃないですか」

高原の声が響いた。

「昨日だって、俺たちと遊んでたんですよ。そのときはすごい楽しそうでしたし、自殺するようなようすはかけらもなかったです。もし自殺だったら、そのときになにか気配がしてもよさそうなものじゃないですか」

楽しそう…ね。そりや楽しかったろうさ、抵抗できないやつをいたぶるのはな。

僕は昨日のことを思いだして、吐き捨てた。心の中で。

「最後だから、無理してたとは思えないか？おまえたちが気づかなかっただけで、ほんとうはずっと苦しんでたのかもしれない。いや、自殺するくらいだから、たぶんすごく苦しんでいたはずだ。それをわかってやれなかった俺が、あいつを殺したのかもしれない…」
倉本が、絞り出すような沈痛な声で言った。

そんなことはないと思う。僕たちもずっと木田のそばにいたけど、そんなそぶりは毛ほどもなかった。それに、ほんとうなら倉本が責任を感じる筋はない。もし倉本が気づいたとしても、木田はどんな助力も拒んだはずだから。そんなことを他人に知られるくらいなら、それこそ死を選ぶかもしれない。

生徒と教師は、同じ世界には住んでいないのだから。

倉本の発言で、高原も一応黙った。納得したと言うよりも、反論ができなくなつたと言つた方が正しいだろうが。そしてそれを境に、木田の気持ちをわかつてやれなかつたことに対する反省が、あちらこちらで聞こえてくるようになった。かたちばかりの、反省。本当は人が何を考えているかなんて、誰にもわかりはしないのに。けれど、ほんとうにどうして木田は死んでしまったのだろうか？あの遺書では、なにが起こつたのかさっぱりわからない。

この日は放課後までなにも起こらなかつた。

有坂は、今日も最後まで学校に姿を現さなかつた。

ホームルームでは倉本が、木田の通夜の話をした。今日は友引だから、明日の夜に行われるそうだ。みんなはそれを神妙に聞いていた。僕はもちろん行く気はなかつた。

そして僕はごく平穩にうちへと歸つた。高原たちの妨害は、まっただくなかつた。木田がいなくなつたから、いじめがおさまつたのかもしれない。そんな希望が、かすかに浮かんだ。

それが恐ろしく浅はかな希望にすぎないということを、翌日僕は思い知ることになる。

第五話 決意

翌朝、いつものように靴箱を開けた僕は、いつもとちよつとだけ違う事に気がついた。

いつもなら上履きに唾が吐かれているだけだったのだが、きょうはそのうえに落書きが一つ。

「人殺しは死刑になれ」

僕には全く見覚えがない字でかかれた、赤いマジックで書かれたその字は。血のような色をしたそれは、水で洗っても落ちなかった。

教室に入ると、部屋の中は静まり返った。それは昨日と同じだったので、ためいきをつきながら自分の席へと向かう。

机は、ひどく切り刻まれていた。そしてその上に、マジックやその他のなにかで、ありとあらゆる罵詈雑言がかかれていた。

「死ぬ」「おまえが犯人だ」「失せろ」「クズ」「出ていけ」「人殺し」……。

僕はめまいがした。僕の机の上にあるのは、誰のものかもわからない悪意。色とりどりの、呪詛。

「よく学校に出てこれるよな」高原の声がした。

「木田は自殺だって、警察も言っていたじゃないか」

僕はそついい返したが、事の真相に気づいて愕然となった。

警察がなんと言つても、たぶん関係ない。

こいつらは、僕を犯人に決めたんだ。

「警察はごまかされても、俺たちはごまかされないぞ」

案の定、高原はそついった。

「早く自首しろよ。自首の方が罪は軽いそうだが」

佐久間が僕の顔を見ながら、あざけるように言った。

「強情なやつだな。おまえしか動機のあるやつはいないんだぞ。お

まえがやったにきまつてるじゃないか」

唐沢が、いまいましげにつぶやいた。

「僕はやってないって言ってるじゃないか」いらつきが声に出た。

「第一、なんで僕が犯人だって決めつけるんだ？」

「それが事実だからさ」佐久間が、得意げな表情を口の端に浮かべながら言った。

「警察は、そう思っていないぞ」あまり自信はなかったが、言ってみる。

高原をはじめとして、ほとんどのクラスメイトが声を上げて笑った。

「まだ気がついてないだけさ」唐沢が、涙を流しながら言った。「もしも最後まで気づかなかつたら、警察にちゃんと言ってやるから」こいつは木田にいじめられていました。動機のあるやつは、こいつしかいません。さつさと捕まえてください」ってな！」

僕の頭は、その一言で沸騰した。こいつら…

僕で、遊んでやがる…！

無意識に拳を固め、一步前へと進み出た。

しかし、彼らは笑顔を崩さない。

「こいつ、やる気だぜ」佐久間があざ笑った。

「べつにいいぜ、やっても」高原が続ける。「おもしろいから。どうせこいつ、勝てやしないし」

「どうぞ、おいでませ」唐沢が、残忍な笑みを浮かべていった。「また遊んでやるからな」

そのとき僕の心を横切った感情を説明することは、たぶん一生かかってもむりだろう。全身の血は沸騰していたが、心のどこかで、まだ冷静なもう一人の僕が、必死で感情を抑えようとしていた。

僕は高原達をにらみつけ、…やがて顔を逸らした。

そのまま僕は机に戻り、荷物を乱暴にかばんに詰め込んで教室を飛び出した。

このままあそこにいたら、きつと憤死してしまっただろうから。

制止の声はかかったが、それは無視することにした。これ以上さらし者になるなんて、耐えられない。

閉じられた教室のドアから、僕をあざ笑う声だけが、いつまでもいつまでも響いていた。

家へ戻ると、母さんに「具合が悪くて早退してきた」といつて自分の部屋に戻った。

実際、そのときの僕はひどい顔色だっただろう。

ベッドに倒れ込むと、今日までのことが走馬燈のように浮かんでは消えた。そして僕は、そのまま深い眠りに落ちていった。

目が覚めると、もうあたりは夕日に赤く染められていた。どうやらうなされていたらしく、冬だというのに服は重く濡れていた。僕はベッドから這い出すと、服を着替え、カーテンを開けた。

冬の短い太陽は、まだ沈んではいなかったが、西の空で生気を失って紅くよんでいた。そのよんだ光の中、僕は膝を抱え、目を閉じ、これまでのことを頭から追い払おうとした。けれど、そんなことは無理だった。

これまでにあったことが、ぐるぐると頭の中を回っている。

誰もいない屋上で、ただひたすら殴られ続ける僕。面白がつて殴り続ける高原、唐沢。後ろでゆがんだ笑みを浮かべる佐久間。

窓の下、閉ざした目の外の世界には、ありふれた日常があるのだろう。母親に手を引かれ、家路につく子供。二人三人と連れだっておしゃべりに夢中な高校生。自転車に乗って、ゆっくりと進んでいく老人。いつもと同じ一日。

ただし、僕には手が届かない。

遠い日常。それがますます遠くなることを、僕は知っていた。

このままでは、僕は犯人にされてしまう。

警察に捕まることは、今のところはなさそうだ。彼らはどうやらこれを自殺だと思っている。でも、もし他殺だということになったら、一番疑わしいのは僕だ。何しろ、ちゃんとした動機もある。アリバイもない。

そして、あいつらがいる。

高原たちはあのとき僕のことを犯人だと決めつけたけれど、おそれたりおびえたりは全然しなかった。ただそれを、僕を痛めつけるための口実にしただけ。

それで、わかってしまった。

つまり、あいつらは僕が犯人でないことを確信している。そのうえで、僕を犯人にしようとしている。僕が苦しんでいるのをみて、楽しむために。僕がなにもできないと思っているから。僕がただ笑われているだけの木偶だと思っているから。

僕はこれまで、ずっと泣いて過ごしてきた。僕は、なにもできないと思ってきたから。じつと我慢しているしかないと思っていたから。

その結果がこれだ。

もううんざりだ。

僕が何とかして生き残るためには、この事件の犯人を見つけなければならぬ。なんとしても犯人を見つけないと、逃げ出せない。そう、たとえこれが本当に自殺だったとしても、犯人を見つけなければ。

ここまで考えて、僕は激しく落ち込んだ。

僕はなにをやってるんだ。

これじゃあ、木田たちがやっていたことと、何にも変わらない。な

るほど、僕がいじめられるのは当然なのかもしれない。

まず調べることは、この事件が自殺かどうかだ。自殺なら、その動かぬ証拠を。そしてもし他殺なら、そのときは真犯人を捕まえる。真相を調べることは、いじめとはあまり関係がないかもしれない。たとえ真犯人…もし、そんなものがあるとして…を捕まえたとして、彼らが僕を真犯人扱いすることをやめることは、たぶん、いやけてないだろう。彼らにとって、これはただの愉快的ゲームにすぎないのだから。

それでも僕は、調べなければならない。この事件の、真相を。

僕がもし、どうしようもない人間じゃないとするならば。僕にも、ひよっとして何かできるかもしれないとするならば。

僕にも何かできることを、証明しなければ。

僕が泣いてばかりの子供じゃないと、証明しなければ。

なによりも、まず自分に。

そうしなければ、いずれ立っていることもできなくなるだろうから。

僕は、まず僕という存在を作らなければならなかったのだ。

日はもう沈みかけている。明日のあいつの葬式には出席しなければと、そのとき思った。

第六話 葬式

朝、いつもと同じ時刻にいつもと同じように目が覚める。さわやかとはとてもいえない朝。

三面の左端に、十行ほどにまとめられたあの事件の小さな記事が載っていた。題字が大きかったのは、この日にありたいした事件がなかったからだ。見出しの大きさに割に内容は貧弱で、ほとんど新しいことはわからなかった。

軽く朝食を済ませると、僕は家を出た。木田の葬式に出るためだった。

葬式にふさわしく、どんよりとした今にも泣き出しそうな空だった。

葬式には、大勢の人が参列していた。クラスのやつも何人か出席していたが、知らせを受けたほかの学校からも小学校時代の同級生がたくさん参列していた。

僕は意外な気がした。今の学校での木田の様子からは考えられないことだった。ひとには、他人からは伺いしれないいろいろな面がある。たぶん、彼らにとって木田はなにを差し置いても駆けつけるべき友達だったのだろう。

木田は、いつから変わってしまったのだろう。それとも、昔から今のようなやつで、ただ周りの人をうまくだましていただけかもしれない。

それにしてもたくさんの参列者だ。僕が死んだとき、果たしてきてくれるひとがいるだろうか？

かなり悲観的に考えつつ、焼香を終えた僕は、クラスメイトを避けつつ、木田の母親を捜した。

木田の母親は、顔見知りの僕が訪れたことを喜んでくれた。けれ

ど、彼女は息子の死にショックを受けたらしく、前にみたときとはまるで変わっていた。目は落ちくぼみ、表情には生気がなく、やつれ果てていた。

彼女をみているうちに、自分のしようとしていることが恥ずかしくなってきた。

どんな息子であれ、彼女は息子を亡くしたのだ。そんな彼女に、さらに追い打ちをかけるかもしれない。それも、ただ自分が助かるためだけに。

それでも、僕は訪ねた。後ろから迫ってくる、不気味な破滅への足音をさけるために。

当たり障りのないお悔やみの言葉を述べてから、僕は本題へとはいっていった。

「木田君が生きていたときに貸していたものを返していただきたいんですけど…」

「いいわよ、なにを借りてたの？」

「結構たくさんあるんで、できたら部屋に行って持ってきたいんですけど…」

「わかったわ、でも明日は忙しいから、あさってでいいかしら」

「はい、お願いします」

拍子抜けするほどうまくいった。

「それにしても、木田君が死んだなんて、今でも信じられません。学校ではなにも変わったところはないように見えただすけれど」

「やつぱりそうだったの？うちでも特に変わったことはなかったみたいなの。あの日は五時頃に帰ってきた後、七時頃に塾へ行行って、それっきり…」

そういうと、木田の母親は泣き崩れてしまった。

「すみませんでした、つらいことを思い出させてしまつて…」

僕が謝ると、木田の母親は苦笑して、

「子供がそんなこと気にするもんじゃないの」といった。

木田の母親に礼を言った後、これからどうするかを考えた。

とりあえず、情報がある。といって、高原達に聞くわけにはいかない。まともに答えてくれるところか、なにをされるかわかったものじゃない。

そこで思い出したのは、いつかの記者だ。「思い出したことがあったら、いつでもきてくれ」と言っていた。社交辞令かもしれないが、それ以外につももない。この事件の取材をしているはずだから、この会場にきているかもしれない。

辺りを見回すと、ちょうど誰かの取材を終えた彼がこつちへと向かってるところだった。

僕が呼び止めると、彼は一瞬ぎよつとした顔をして、それから愛想笑いを作ると、「何か思いだしたの？」と聞いた。

「そんなにびつくりしましたか？」

「何が？」

「容疑者が話しかけてくるのが」

そういうと、彼はさらにぎよつとした顔をした。

彼にかまわず、僕は続けた。

「それも含めて、すごく重要な話があるんです。事件の前の木田の様子についてとか。聞いていただけますか？」

僕は学校から少し離れた喫茶店に入った。

「いい店を知ってるなあ」

中山の感嘆の声が聞こえた。

「コーヒーが飲めればさまになるんですけどね」僕が答えた。「どうも、苦くて」

「そうか、苦いか」中山は大笑いした。「安心したよ。ちっとも中学生には思えなかったからな」

コーヒーとオレンジジュースが運ばれてきてから、中山が口を開

いた。

「さて、俺をここに連れてきた用件だけでも」

「わかりました。知っていることは話しますよ」

僕は、あの日の木田の様子から始まって、僕が受けていたじめのことや、今のクラスの状態について彼に話した。有坂のことは話さなかったけれども。

僕の長い話が終わっても、中山はしばらく無言でいた。その無言に耐えられなくなった頃、中山がぼつりと言った。

「警察に届けるべきだ。こういうことは、しがない雑誌の記者がやることじゃない。すぐに連絡しなさい」

「いやです」誤解しようもない声で、僕ははっきりと言った。

「どうしてだ？」

「僕のいじめがなくなるかどうかは、これにかかっているからです。今僕は、クラスのやつから犯人だと思われています。動機もありますけど、何よりそのほうがおもしろいからです。こんな時に警察なんかが捜査をしたりすれば、どんなことになると思います？別に、警察が僕を犯人だと決めつけるとは思ってません。そこまで無茶なことはないと思います。けれど、みんなは『警察に調べられた』『怪しいやつ』に対して、どんな反応をすると思います？たぶん、警察の捜査結果がどうあれ、僕が犯人だと思われそうですよ。『警察が捜査したのは、あいつが本当にやったから。捕まらなかったのは、うまく隠し通したから』絶対にそうなりますよ。だから、僕の手でこの事件の真相を見つけます。でないと、僕はいつまでもいじめられたままでしょうから……」

「それこそ警察に介入してもらえばいい。でなくても、例えば学校とかに言えば、いじめはなくなるんじゃないか？」

「無理ですよ」僕は彼の言葉を、あっさりと否定した。

「むしろ、事態を悪化させるだけです。頼むから、黙っていてもらえませんか」

「どうしてだ？」彼は明らかに鼻白んだようだった。

「大人が介入すれば、確かに表面上は穏やかになるでしょうよ。みんなが僕に頭を下げて謝って、みんな反省して、はいおしまい。あの人たちは安心して、これでいじめはおさまった、と言って手を引くでしょう。あの人たちにはそれでいいでしょうけど、僕らはずっと一緒なんです。いつか必ず、矛盾は吹き出しますよ。何しろ、根を絶っていませんから。」

よほどの覚悟がないと、いじめを終わらせることはできませんよ。まして、今はみんなの関心があの事件に集まっています。僕のいじめの解決への人手も関心もないでしょうし、それを解決するだけの力は、今はこの事件にとられてしまっています。とても無理ですよ。だからこそ、あの事件を解決することによって、僕が犯人でないことを証明します。ひょっとして、これでいじめがおさまるかもしれません。あまりうまくいかないかもしれませんが、ほかにどうしようもないじゃないですか」

「どうして、君は反抗しないんだ？ 相手と戦えば、むしろは手を出さなくなるんじゃないか？」

テレビなんかでよく聞く議論だ。おめでたすぎて涙が出てくるようないな。

一瞬頭に血が上りそうになったが、ここはおさえた。なるべく冷静な声で話し出す。

「ハムスターは知ってますよね？」

「ああ」突然なにを言い出すのかと、中山は怪訝な顔をした。

「ハムスターは檻の外にできることができません。だから、唯一動かせる回転車のなかで、必死にもがくしかないんです。自分にできることはそれだけです。そしてその必死の形相をみて、人は笑うんです。どれだけもがいても、それが自分に危害を加えることは

ないと、確信できるから」

「言っていることがよくわからないが……」

「反抗することは簡単ですよ。だれにだってできます。けれど、もしその反抗が役に立たなかったら？それどころか、みんなが僕を怒らせるために攻撃を加えたとしたら？みんなが、僕の怒りを、ゲームとして絶対安全なところから楽しんでいるとしたら？僕は、あいつらを喜ばせるために怒らなきゃならないんですか？

ハムスターはそれでも回り続けます。感情がなければ、ひよつとして僕にもできるかもしれません。けれど僕にはそんなことはできません。おもちゃとして怒りつつけるなんてまっぴらです。

それから、もうひとつあります。

すぐくゆがんではと思いますけど、僕もあのグループの一員だったんです。どんなひどいことをされても、僕はあそこから完全には離れられませんでした。あそこは、どんな形であれ僕がいることのできた、たった一つの場所だったんです。ほかの場所では僕は空気にすぎませんでしたから……」

僕がそういうと、中山はゆっくりと立ち上がり、「今は聞かなかったことにしておこう」といった。

「ちよつと待ってください！聞いただけ聞いておいて、いまさら何も言わないなんて……」

僕の抗議にも耳を貸さず、彼はドアへと向かっていく。

そして、肩越しに、「酔っぱらいの戯言はたくさんだよ」といった。

「酔っぱらい？」一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「そう。酒じゃなくて、自分の不幸に酔ってる。君の言ったことは本当かもしれない。けれど、公平とはとてもいえない」

「そんなことは……」僕の抗議を無視して、中山は続ける。

「よく、ちよつと気分が沈んでたり、多少具合が悪いだけで、自

分が何か重大な病気だと思う人がいるだろう？」

「ええ」

「ああいう人は、本当は自分がなんでもないことを知っているんだ。その上で、いかにもすごそうな名前の病気を語るんだ。自分が「特別」になりたいから」

「特別？」

「そうだよ。よく言われるじゃないか、個性をもてって。特別な人になれって。けれども、そういうものはそう簡単になれるもんじやないし、今、本当に特別な人なんて、どこにもいないだろう？だから、病気の名をかたるんだ。「不幸」も「特別」のひとつだからな。それがまねごとであるかぎり、「本当」の「不幸」じゃない、ただの「特別」にすぎないから。少なくとも、そう思えるから」

「僕の話が、そのたぐいだと？」

「そうはいつてないさ。たぶんそれは本当の「不幸」なんだろう。けれども、それを解決するために、君はなにをやったんだ？なんにもできないといいながら、不幸を、それからでくる「特別」という優越感をもって、ただ待っていただけなんじゃないのか？」

聞いた瞬間、脳が沸騰した。もし思念で人が殺せるなら、中山を殺してしまいたかった。苦勞して、次の言葉をしぼり出す。

「そうならないように、お話を伺っているんじゃないですか」

「確かに今はそうだろうさ。けれどこれまで、君はなにをやったこなかったわけだ。これまでの考えが強すぎるんじゃないのか？もう少し冷静に考えなさい。そもそも、自分がこんなに思い詰めているから助けてくれるだろうってのは、虫がよすぎやしないか？」

「そんな…」

「ああ、これからはもうこないでくれ。こちらから話すことはないから」

話すことはないって…人に言うだけ言わせておいて…

僕の殺気には気づかない振りをして、彼は笑顔を作り、「ここは

おごるから」といつて支払いを済ませ、さつさとでていった。

よっぽど灰皿でも投げつけてやりたかったが、あとが怖いのでできなかった。それがまた、惨めだった。

なにも言い返せなかった…。

それは中山の言葉が正確だったから。僕がなにもしないで、被害者意識だけ募らせていたから。

でも、悲劇のヒーローのふりをすることで、やっと自分を支えていられるのだろう。そうでなければ、あまりの重さに息もできなくなっていたろうから。殻の中に閉じこもることで、やっと自分を支えていることができる。でも、いくら殻の中に閉じこもっていても、あいつらはそれを無視して踏み込んでくる。僕はそれから逃れるために、よりいつそう奥へと潜る。その繰り返しがいやだったから、僕は動き出したはずだったのに。

彼は結局、僕よりもずっとしたたかだった。たぶん今のネタも、彼と契約している雑誌にでも売るのだろう。おもしろおかしく脚色して、渦中の人にインタビューとでも銘打って。

そこまで考えて、僕はあることに気づいた。彼の雑誌に載ると言うことは、一週間後には僕のいじめのことをみんなが知ると言うことだ。いじめはひどく、しかもめだたないようになるだろうし、警察も動き出すかもしれない。

どうすればいいのかわからなかった。

わかったことは、僕にはあと一週間しか時間がないということ。

どんな方法でもいい。動かなければいけない、ちゃんと自分の足で。

でも、どっちへ動けばいい？そもそも、動けるのか？僕はただ、狭苦しい檻の中で、気ばかり焦っているだけじゃないか？

わからなかった。また僕は、自分を見失ってしまったらしい。

第七話 公園

どこまでも続く迷路の中を、僕は一人で逃げていた。
後ろからは、殺気立った声。

迷路は自在に変形し、まがりくねり、自分がどこにいるかもわからなくなる。

それでも声は追ってきて、足音が近づいてくる。姿は全く見えな
いのに。徐々に近づいてくることだけはわかる。手近のドアに飛び
込み、細い路地を抜け、それでも声は近づくばかり。

追われながら、僕はただ一つのことを願う。

助けてくれ、助けてくれ。

助けてくれ！

とびおきた。ベッドの脇の時計は十二時を指していた。
いつも見る夢だ。夜毎続く悪夢。

ふと、留守電のランプが赤く光っているのに気がついた。僕は何
の気なしに受話器を取った。

「…有坂です。ちょっと聞きたいことが…」

すぐに次のを再生する。

「…有坂です」

十回以上の電話は、すべて有坂からかかってきていた。
家にはいられない。電話がまたかかってきたら、どんな行動をと
るか自分でもわからないから。

誰も起きていないことを確かめると、そつと家を出た。

誰もいないところにいきたかった。かといって、この部屋で膝を
抱えていたくもなかった。

冬の夜空は冷たくて、まるで生あるものすべてを拒んでいるよう

にさえ見える。それでもその下には、冬に逆らい、生きようとしてもがくものたちの姿がちらほらと見えた。

彼らは何で生きていけるのだろう。なにも起きていないような顔をして、どうやって生きていけるのだろう。

街灯が丸くほのかにあたりを照らす公園で、僕は一人星を見上げる。張り付きそうなくらいに冷たいベンチに腰を下ろし、あたりの寒気を十分に吸い込んで。

このまま凍ってしまいたかった。体も、そして心も、なにも感じなくなるまで。この体が凍てつき、心臓の脈動が止まるまで。

どのくらい、そうしていただろうか…。

遠くから人影がやってくるのが見えたが、僕は黙殺した。

やがてその人影は公園に入り、街灯の光を浴びて白くほのかに浮かび上がった。

白く照らされた顔の表情を見分けるのは難しかったが、僕にはそのひとがどんな顔をしているのかはすぐにわかった。

わからなかったのは、彼女がどうしてもここに来たか。どうしてもここにいるとわかったのか。

「黒川くん」

有坂の声だ。この数日、ずっと聞きたかった声。僕が拒んだ声。

「やっと、みつけた…」

そういった彼女の声は、悲しげで、苦しげで…

そして、怒りに満ちていた。

「どうして、こんなところに？」僕の問いに、彼女は少しあきれたようだ。

「気づかなかったの？ずっとついてきてたのに」

驚いた。ぜんぜん気がつかなかったこともそうだが、こんな時間に有坂が出歩いていることにも。

「こんな時間に、どうして……」

「電話も取ってもらえなかったから。黒川君の家まで行って。電気が消えてたから帰ろうとしたら、とぼとぼと歩いてくから」

そういうと、彼女は僕をにらんだ。

「どうして？どうして、さよならなの？どうして何もいってこないの？」

僕は、目を合わせない。うつむいて、じっと聞くだけ。

「わたしのこと、嫌いになったの？」

今にも泣き出しそうな声で、有坂が言う。

「ちがう！そうじゃないんだ……」

思わず言いかけて、それが無意味なことに気づく。

けれどこういう反応をしてしまった以上、有坂に説明をするしかなくなってしまった。

「いやだよ、有坂を巻き込むのなんて。あのとくにわかっただろ？僕が有坂と一緒にいれば、後で必ず迷惑がかかる。ただでさえ、有坂ひどい目に遭ってるのに、これ以上迷惑をかけるわけにはいかないよ」

僕はそういうと、またうつむいた。

「どうして、あのとときわたしにそういわなかったの？」

「言ったら、有坂さんのことだから、絶対「そんなことない」っていうと思ったんだ。そんな風に気を使ってほしくなかった。これは、僕の問題だから。ひどい目に遭うのも、決着をつけるのも、僕一人でいい。巻き込みたくない」

僕がそういうと、沈黙が訪れた。

沈黙は、長く続いた。

その沈黙に耐えきれなくなってきたころ、有坂が口を開いた。

「逃げないでよ」

有坂の口調は冷たくて、そのくせやけどしそうなくらいに熱かった。

「どうして、わたしに迷惑だと思うの？ どうして、何もいつてくれなかったの？ そんなにわたしが信用できなかったの？」

わたしだって、黒川君と一緒にいたから、今までやってこれたのに。黒川君がいなかったら、わたし……」

有坂は、そこで言葉を切った。言葉が続かなくなったようだった。ひとつ息をつき、彼女が続ける。

「わたしのことをわかってくれなくても、わたしをいじめずに、見下しもせずに、ちゃんと受け入れてくれたから、だから一緒にいるの。もっと自分に自信を持つてよ。黒川君がどんなにわたしの支えになってくれたか、黒川君、ぜんぜんわかってない。」

一緒にいれば迷惑がかかる？ それがどうしたっていうの？ いまだって、あいつらにずっといじめられてることは、変わらないのに。誰も一緒にいてくれないことの方が、ずっとつらいのに……」

そういうと、有坂は僕の顔をじっと見た。茶色の大きな瞳が、僕をにらみ据えている。

どうしよう。また、有坂を悲しませてしまった。有坂を悲しめないために、有坂にいらない苦勞をさせないように、有坂と別れたはずなのに。

けれども、ここで引くわけにはいかなかった。

「だめだよ。あのときより、状況がもっと悪くなった。悪いことは言わないから、離れた方がいい」

「……なにかあったの？」

「木田が死んだ」

短く言うと、彼女の顔が引きつった。

「学校の屋上から飛び降りたんだ。自殺だって、警察は言ってる。」

けれど、高原たちはそうは思っていない。このままじゃ、犯人にされてしまう。今まで僕のことを知らなかった人にまで、いろいろといわれてるんだ」

ここで、言葉を切る。

「だから、僕と一緒にいない方がいい。有坂にまで迷惑がかかるから。有坂、ただでさえ大変じゃないか。これ以上、つらい思いをさせたくないんだ」

これを聞くと、有坂の顔に朱がさした。

「…いつもそうなんだね」

不意に有坂の声がした。

「何でも自分で決めちゃって、しかも自分だけで悦に入ってるの。自分一人で我慢していればいいって、それがどれだけあたりの人を傷つけるか、考えたことある？信用している相手から信用されないことが、どれぐらいつらいことか、考えてもいないでしょう？ひどいよ、黒川君。自分の都合だけで話進めちゃって、結局私がどう思ってるかなんて、ぜんぜんわかってないんだから」

それだけいって、有坂は僕をにらみ据えた。いつも悲しげに曇っていた瞳が、今はまっすぐに僕を見つめている。

「私が黒川君に何かしてあげたいの。迷惑がかかるなんて思わないで。それは、私に対する侮辱だよ。私がそんなに信用できないの？信用できないのなら、黒川君が見てた私は、黒川君が自分で勝手に作り上げた私だよ。そんなものを守ってもらっても、迷惑なだけ自分一人で、勝手にやればいいわ」

有坂は、もういつもの仮面をかなぐり捨てていた。怒りのせいか、手足が小刻みにふるえている。

ずっと、一人だと思っていた。

もう小学校の時には、僕の周りに誰かがいた記憶がない。

他人なんて当てにならなかった。自分のことは自分でけりを付け

なければならぬ、そう思っていた。

誰かに頼るなんて、弱いやつのことだと思っていた。
ちがう。

…怖かったんだ。

僕が誰も頼りにしてないこと。誰にも頼りにされてないこと。自分すら頼りにしてないこと。

僕が、他人も自分も切って捨てて、残りの部分だけ、それもいつでも切って捨てられると思いながら、自分の殻に閉じこもっていること。

それを思い知るのが、怖かったんだ。

だから、有坂を傷つけた。有坂のためなんて、嘘だ。信用できない他人を、自分の中に入れたくないだけだったんだ。

けれど、もう戻れない。

たぶん、最初に有坂と屋上であったときから。

誰かと一緒にいるということを知ってしまったから。

昔は寂しいとさえ感じなかった。

カーテンを閉めて、真っ暗な部屋で闇を見つめてただ座っている。それがふつうだった。

でも、あの屋上でひかりを見たから。あのとき胸にともった光は、ずっと心の奥底にあって、どうしても闇を遠ざける。

有坂にとって僕が、この世へと結びつけるただ一つの鎖だったように。

僕にとっても有坂は、ずっとひかりのまま。

忘れることなんてできない。

自分だけで何でもできるなんて、嘘だ。自分は何にもできないのも、嘘だ。

そんな風に自分を甘やかしちゃいけない。
たいせつなのは、だれかとかかわること。
相手を受け入れようとすること。

自分も他人も切っていくのは、臆病だから。
せめて自分や友達は切らないように。

「有坂…」

静かに頭を下げる。

「ごめん、有坂、ごめん…」

それしか言葉がでてこない。

不意に有坂が顔を上げた。

「黒川君、泣いてるの…？」

泣いてる？僕が？

聞き返そうとしたけど、できなかった。

「あれ…」

なんだか目の前がぼやけている。

なにも、みえない。

いつの間にか、僕の目から熱いものが流れ出していた。

それは後から、後から流れ出し、頬をぬらし、地面へと吸い込まれていく。

ふいに、何かに抱き寄せられた。

顔を上げると、有坂の潤んだ目が見えた。

「何も言わないで」有坂の声は、決意を秘めていた。

「黒川君は、私が守ってあげるから。絶対、守ってあげるから」

有坂は、あたたかかった、とても。

僕は有坂に抱きしめられながら、ただ泣き続けた。

第八話 起動

翌朝目覚めると、部屋は柔らかな冬の光に満たされていた。昨日のあの気分も、まるで嘘のように晴れ渡っていた。

学校へ行くのが楽しみになったのは、ずいぶんと久しぶりな気がする。

たとえ、実際にはなにも変わっていないとしても。

朝食のトーストを口に運んでいると、チャイムが鳴った。

とたんに、いやな気分になる。

（あいつらが、また来た）

たまに気が向くと、あいつらはこの家まで迎えにくる。通学路では逃げることもできないから、されるがままにいるしかない。

しばらくすると、応対に出た母さんが戻ってきた。

「誰？」

僕が聞くと、母さんはそれには答えず、「やるじゃないの、あんた」といった。

（…？）

「ほら、待たせてないで。さっさといきなさい」

せかされて玄関から顔を出すと、そこには有坂が、恥ずかしそうに顔を赤らめて立っていた。

「どうしたの？」

僕が聞くと、有坂はますます顔を赤らめ、「…一緒に、学校、いかない？」と、蚊の鳴くような声で言った。

「…うん、わかった。ちよつとまってて」

大慌てで支度を済ませ、家を飛び出す。

「おはよ」

「迎えに来てくれたんだ」

なんだか、顔が熱い。

「うん…」向こうも、まだちょっと顔が赤い。

「でも、あいつらが待ち伏せしてるかもしれないし、危ないよ」

「だから一緒にいかないなんてのはいやだよ」

僕が切り出す前に、先にいわれてしまった。

「黒川君は、私が守ってあげるんだから」

その言葉で、なんだか胸の奥が切なくなった。

「けど、なにもしてくれなくていいよ。自分のことは自分で何とかしたい」

「でも！」

「それより有坂のほうが心配だよ。僕のせいで、有坂がひどい目に遭うのは、やっぱりいやだし」

有坂が何か言う前に、言葉を継ぐ。

「だから、明日からは僕が有坂の家に迎えに行くよ。有坂の家つて、どこ？」

そういうと、有坂はますます顔を赤らめた。

「でも、逆方向だし…」

「どこに住んでるの？」有坂の問いを無視して、もう一度訪ねる。

「…泡原公園のそば」

「だったらそう遠くないし。詳しい場所を教えて。明日から迎えに行くから」

「でも…悪いよ」

「危ないところを女の子に来てもらう方が、よっぽど悪いよ。だいたいようぶ、気にしないで。時間帯やコースをあいつらとずらせばいいだけだから」

僕が重ねていうと、有坂は小さく、でもはっきりとうなずいた。

冬の冷たく澄んだ空気の中、二人で歩く。所々に降りた霜を、小さくと踏みながら。

「それで、これからどうするの？」白い息を吐きながら、有坂は聞いた。

「とりあえず、事件のことを調べるよ。警察もマスコミも当てにならないことはわかったから。自分の足だけで、何とかやってみる」

「できるの？」

「とりあえず、やるだけやってみるよ。心当たりがないわけじゃないんだ」

「あんまり危ないことはしないでよ」有坂が、心配そうに僕の顔をのぞき込む。

「大丈夫だつて。だいたい、このままなにもせずにはぼーっとしての方が、ずっと危ないじゃない。だったら、やれることはやっておいた方がすつきりするしね」

「…黒川君、変わったね」有坂が、どことなくうれしそうな顔をした。

「そうかな」

「うん。なんだか前向きじゃない」

「そうだとするなら、変えてくれた人がいるんだよ」

そういうと、有坂はさらに顔を赤らめた。倒れないのが不思議なくらいの顔色だ。

これ以上ほめると、ほんとに倒れてしまいそうだったので、それからはたわいもない話をすることにした。

有坂の顔色がやっと普通に帰った頃、校門が見えた。

「じゃ、あとでね」

このまま校門をくぐれば、あいつらにいじめられる格好のネタになってしまう。だからここで、別れなければならぬ。

「…気をつけてね」

それだけいうと、彼女は先へと進んでいった。

気分はずいぶんと良くなったけれど、結局、一から調べなくてはならなくなったことにかわりはなかった。

どうすればいいんだろう。どんな細い系でもたどっていくとすれば、まずあいつと同じ塾のやつがいいだろう。学校の様子なら僕もよく知っているし、学校以外であいつと仲のいいやつがいるところと言えば、普通は塾だろう。

ちょうど打ってつけのやつを、僕は一人知っていた。長谷部雄一だ。彼はこのクラスでいじめに加わっていない唯一と言っていいやつだった。それなのにいじめられないのは、彼が柔道で全国大会に出たことがあると言うこと以外に、敵を作らず、どんな人ともある程度のつきあいをしているからだった。こんな状況でも、あいつならそれほど邪険にせずに僕の話聞いてくれると思った。

僕が切り出した話に、予想通り長谷部は興味を持ったようだった。

「あの日も、特にあいつに変わった様子はなかったぜ」

苦笑する長谷部に、僕は食い下がった。ここで引き下がったら、唯一の糸が切れてしまう。しつこく問いただすと、やがて彼はぼつりと漏らした。

「そういえば……」

「そういえば？」

「いつもあそこでだべってくあいつが、あの日だけは妙に早く帰ってたんだよ。それが少し変だったかな」

「君の他に、あの塾に通ってる知り合いとかいないか？」

「一組の神崎なんか、あいつと仲がよかったぜ。あいつなら、何か知ってるかもな」

神崎は、髪を茶色に染めた、少し怖そうな男だったが、見た目よりずっと気のいいやつらしく、僕の質問に親切に答えてくれた。

「ああ、あいつなんか用事があるとか言って先帰ったんだ。友達と遊ぶ約束だつていつてたけど、たぶん口実だったんだろうな」

「どうして？」

「あの後、すぐあいつ死んじまったじゃないか。場所はここの屋上だったんだろ？一人になりたかったんだよ、多分な」

「そのとき、どんな様子だった？」

「それが、変な話でな。なんか少しうれしそうに見えたんだ。ほおとかゆるんでたし。表に出さないようにしてたみたいけど」

「自殺したのに？」

「そういうと、彼の顔が少し曇った。」

「そうだよな、やっぱり見間違いかもしれないな……」

僕は礼を言つて一組を後にした。

おかしい。木田の様子すべてがおかしい。

どうして木田は笑つてたんだ？

どうしてそんなに自然に振る舞えた？

それは確かに、他人のことだから。ひょっとして、木田はそういう奴だったのかもしれないけど。

それにしたつて、これから死ぬと言うときまで、そんなに落ち着いていられるか？

そんなことはない。少なくとも、あいつはそんなタイプじゃない。そこまですまく猫をかぶれるやつじゃないはずだ。

あいつが僕をいじめたとき、ずっと猫をかぶり続けていられたのは、それについて何とも思っていなかったから。いじめることに、何の良心の呵責もなかったから。

自分の命にまで、あいつはそんなに無関心じゃない。少なくとも、何の動揺も示さずに命を捨てるほどには。

とすると、やっぱりなにかあったのだろうか。

笑っていたぐらいだから、彼にとってそんなに悪いことじゃなか

ったはずだ。あたりにそれを隠したと言うことは、何か知られたくないことがあったに違いない。

…というようには、推理は進まない。証拠がない以上、これはただの妄想にすぎない。さしあたって必要なことは、その日実際には何があったか。なぜ屋上へと向かったのか。直接屋上へと向かったのか。電話の相手は。

…どうやって調べるんだ、そんなもの。

とりあえず、長谷部や神崎に紹介してもらった塾生の何人かに話を聞いた。

けれど、それほど目立った結果はでなかった。

やっぱり、テレビで見るようにはうまくいかないものだ。

第九話 現実

午後の授業が始まった。英語の教師の声を聞き流しながら、これまでの情報を整理してみる。

そもそも、あいつが殺されたとするなら、理由は？あいつをどうにかしたいなら、何も殺す必要はない。今の僕と同じような状況に置いておけば、それでいい。それをわざわざ殺人なんて言う危険を冒すからには、それなりの理由は当然あるだろう。

刑事ドラマなんかでは、どんな動機があっただろう？

財産目当て？それだったら木田を殺さなくても、もっと手っ取り早い手段があるだろう。だいたい木田のうちにそんなに財産があるとも思えないし。

怨恨？…やっぱり、それが。しかし、あいつを殺したいほど嫌いなやつが、僕の他にいるだろうか？ほかは…

（恐怖）

ふいに、まったくふいにその二文字が浮かんできた。

恐怖？

何に對しての？

受験？学校？…仲間？

あいつに對しての恐怖？よくわからない。あいつが、そんなに怖かったのか？それは確かに、僕も怖かったけれど。それよりも怒りの方が強かったから。

他の恐怖…

考えつつ歩いていると、向こうから高原達がやってくるのが見えた。

「おい！」

「よけいなことすんじゃないぞ！犯人になりたくないからって、

自分の罪を他人に着せるな！」

口々に罵声が浴びせられる。

高原が僕の右手をねじりあげる。そこで唐沢が、鳩尾を蹴り上げた。

目の前が真っ白になった。廊下に膝をつき、腹を押さえてけんめいに吐き気をこらえる。

佐久間が、その僕の指をひねった。

苦しむ僕を、しかし周りの連中は笑ってみているだけ。

いや…笑ってもいない。あいつらにとって、この光景はいつもの光景。記憶の隅にも残らない、ありふれたつまらない出来事。

だから彼らはただ通り過ぎる。殴られる僕だけがそこに残る。

十分後、彼らにとっての憂さ晴らしは終わった。

そこに残ったのは、いつも通り立つこともできない僕。

木田が死んでも、今のところ状況は全く変わっていない。僕はあちこちで殴りつけられ、なにもできないままに終わる。

違っていているのは、僕の心だけ。なんとかして、この状況を終わらせる。その気持ちだけが、ぼくを前へと引きずっていた。

次の休み時間。長谷部の友人から話を聞くために西の廊下を歩いていると、突然下の中庭から怒鳴り声が聞こえた。

窓から見下ろすと、女子の一団が女の子を取り囲んでいるようだった。

（あれは…）

秋川だ。有坂をいじめている女子のリーダー格。

髪を振り乱し、足下の女の子を蹴り付け、殴りつける。

りの女の子も、はじめは荷担していたようだったが、今はお互いうそ寒そうに顔を見合わせている。

秋川に、岸、宮野、里中、そして…

（有坂……！）

僕はそれを見るなり走りだした。

ちょうど予鈴が鳴る。あたりを囲んでいた生徒達も、秋川達も去っていく。

「有坂！大丈夫か？」

「うん……へいき……」

立ち上がるうとして、へたへたと崩れ落ちる。

「ちよつと……だいじょうぶじゃないみたい……」力無く笑う。

「いいから、どこかで休んで」

何とか有坂を助け起こし、保健室へと運ぶ。

「ひどいことを……」

「いつものことだよ」

「あれが？いつもは知らないけど、ずいぶんひどくなかったか？」

「確かに、いつもよりはひどかったんだけど……」

そこで言葉を濁す。

「あのひと、木田君とつきあってたから……」

「……それか」

だったら、あそこまで狂乱するのもわかる。

「ごめん、巻き込んだじゃって」

「いいよ」有坂はそういつて、乾いた笑顔を見せる。

「黒川君がどう動こうと、木田君が死んだ以上あの子にいじめられるのはわかってたから」

「ごめん」有坂の無理をした笑いに、僕はもう一度謝るしかなかった。

放課後、僕は商店街へと行くことにした。ここは、あいつらがいつも通る場所だ。もし昨日もここを通ったなら、何か知っているかもしれないと思って来てみたが、いったいどうすればいいんだろう？

あいつらのいつものコースといえば、ゲーセンか本屋、コンビニくらいだ。僕は何度もここにつれてこられたことがある。そのときはにぎやかに話していたから、僕らのことを仲がいいと思っているひとも多い。じっさい、そうみえるようにふるまってきた。ただ、帰ってきたときに、見知らぬ品物が隠れたあざが増えただけの話。とりあえず、いつもの店から初めて、だんだんとあたりの店に広げていくのがいいだろう。

聞くことは、あの日のあいつらの様子と、コース。さしあたりそれだけでいいだろう。

それ以上、この段階で聞いてもしようがないし、そもそも刑事でもない僕にそこまでのことはできないだろう。

僕は早速、一番近くにあった本屋から話を聞いて回ることにした。

何軒か聞いて歩いていくうちに、花屋で足取りがつかめた。

彼らは四人で店に入り、花を買って出ていったそうだ。

「花？」僕は聞き返した。中学生、特にあいつらには似ても似つかない言葉だったからだ。

「ええ。あの年代の子が花を買うなんて珍しいから覚えてたのよ」花屋の店主も、それには同感だったようだ。

「何の花を買ったんですか？」

「普通の花束ね。彼女とかにあげるには、ちょっと地味かもしれないけれど」

他に何か覚えていることはないか聞いてみたが、目立った答えはなく、礼を言って店をあとにすることにした。

木田の母親に電話をかけ、聞いてみる。

「木田君が帰ってきたとき、花とか持っていましたか？」

「ええ。何でそんなものがいるのかって聞いたら、少し預かってるんだって言ってたけど」

「その花は、今どうしてます？」

「玄関に飾ってるわよ。このまま枯らすのももったいないし」

電話を切ると、僕は少し考えた。

どうして木田は花なんか買ったんだろう？

どうしてこんなことが気になるかわからなかったが、きちんと調べた方がよいと思った。花なんて、普段のあいつが買うとは考えられない。誰かから預かったといっても、残りの三人の中にも、花が必要そうなやつはいない。それにあの花は木田が買ったのだというから、あの三人から預かったというのも少しおかしい。

そもそも、花はどんなときに使うだろう？

家や教室を飾るのが一番あるけれども、あいつらは美化委員じゃないから教室の花を買うというのはおかしいし、家で頼まれて買ったんじゃないってのはさつき聞いたとおりだ。儀礼や式典の時に、飾ったり渡したりすることもある。でも、あいつらはこれとも関係がない。

好きな子にプレゼントするということもある。木田が買ったとしたら、これかもしれない。

友達から預かっていたというのも、それを隠すためのちよつとした嘘と考えれば、筋は通る。

(…でも、待てよ)

そうすると、木田は秋川にこれを渡すつもりだったということになる。つまり、木田には死ぬつもりはなかったということになる。

どんな花なのか、確かめたかった。木田の親との約束は明日だったから、そのときに見に行ってみよう。

第十話 電話

家に帰ってからまずやったことは、有坂に電話をかけることだった。

「あのあとは何もされなかった？」

「うん。黒川君は？」

「いつもどおりだよ」

受話器の向こうで、有坂の声が曇るのがわかった。

「大丈夫だった？」

「へいきへいき。いつものことだしね」わざと明るい声を出す。

「それならいいけど…むりしないでね」

「ありがと。心配してくれて」

「そ、それよりも、あの事件のことを調べたんでしょ？ なにかわかった？」なぜかややあわてた声で、有坂が言った。

「二、三わかったことはあるんだけどね。これがどう結びつくのかは、まだ今ひとつ」

「そっか…」

「まあ、焦らずに調べてみるよ。素人のすることだし、テレビみたいには行かないって」

「まあ、そうだね。私にも何かできることがあったら言ってね。なんでもするから」

「ありがと」

礼を言って電話を切る。

正直、有坂が協力してくれてもあまり調査が進むとは思えなかった。こういう調査だと、みんなに話が聞けなければどうにもならない。それは今日一日で痛いほど分かった。僕と同じでクラスから孤立している有坂に、僕よりうまく調査ができるとも思えない。

でも、有坂の気持ちはうれしかった。

（ありがたいよな）

実際、思う。あれだけのことをしておいて、まだ協力してくれるんだ。どれだけ感謝したって、したりないと思う。

（でも）

ふと、思った。

どうして協力してくれるんだ？それが少し、気にかかった。僕は有坂に、何にもしてあげられてないのに。どうして有坂は、あそこまでして…

しばらく考えたけれど、どうもわからない。結局、それは棚上げにすることにした。有坂は、僕の味方をしてくれる。それで十分じゃないか。今はそれよりも、もっと別のことを考えよう。

僕はこの事件を、順を追って考えることにし、ベッドに寝ころんだ。

あの日の前の何日間かの木田の行動を思い出そうとして、それが思い出せないことに気がついた。いや、思い出せないのではなく、もともと知らないのだ。

そういえば最近、いじめられる回数が減っていたような気がする。だから有坂と会えたわけだし、そこで気分が良くなっていたからこそ、屋上の鍵を取り上げられたときのショックが大きかったわけだ。

でも、それは偶然なのか？

そのときなにかあって、僕に関わり合っていていらなかったとは考えられないか？

そうだとすれば、いじめが鈍ったのも納得がいく。そこで起こったことが、木田が死ぬ原因になったのかもしれない。

とりあえず、あの日の木田たちの様子を聞かなければならない。といっても、誰に聞けばいいのか…

不意に、電話が鳴り響いた。知らない電話番号だ。

あの事件があつてから、たまにおかしな電話がかかってくるようになった。たいていは無言のままか、僕のことをなじって終わる。知り合いからの電話なんてかかってこないけど、親の都合上電話ははずせなかったから、しばらくは電話にでるのも怖かった。今日になって、やっとそれが一段落ついたところだった。

十分に用心しながら、受話器を取る。

「…黒川？」

秋川の声だ。

「…なんの用だ」声が硬くなるのがわかる。

なんで秋川から電話がかかってくる？

「しらばつくないでよ」電話の向こうの声は、硬くどがつている。

「なんのことだ？」

「木田を殺したことよ！」

「僕は別になにもやってないよ」

本当は、すぐに電話を切つてしまえばいいことはわかっていた。

しかし、なぜか切ることはできなかった。普段の秋川とは違う…

少し考え、すぐに答えがでた。いつもと違って、声に余裕がない。

「あんた以外に、誰があいつを殺す必要があるのよ」

「知らないよ。とにかく、僕じゃない」

秋川の声聞きながら、僕は秋川がなぜこんな電話をかけてきたか必死で考えていた。

僕に嫌がらせをするくらいなら、なにも自分の名前をあかす必要なんてどこにもない。自分が不利になるだけだ。無言で、匿名で嫌がらせをするだけで、十分に向こうの目的は果たせるのだから。

なにか、秋川が名前を明かした理由があるはずだ。

それを突き止めようと、僕は秋川の話しに耳を澄ます。しかしそれは、すぐに明らかになった。

「木田は、あんたに殺された。あたしはなにもしてやれなかった。だからあたしにできることは、それをつきとめることだけ」

秋川の声に、偽りは含まれていない、ように見えた。

「今晚十時に、高夜団地の公園に来なさい。どんなことをしても、あんたからこの事件のことを聞かせてもらう。もしだめなら……」

「だめなら？」

「あんたを殺してもいいけど、それじゃあ一瞬で終わっちゃうから。もつともつと苦しめてあげる」

「具体的にはどうするつもりなんだ？」思わず、声に力がこもる。「あんたはもう一人人を殺すことになるの」秋川の声には、紛れもない喜びの響きがあった。

「私が自殺するの。この事件の「真相」を、遺書に書き残してね。あんたはもうひとり人を殺すことになる」

「なんだと？」

瞬間、これまでたまっていた怒りが、一気に沸騰した。僕ら二人に、あれだけのことをしておいて。

この事件まで僕らのせいにして、それでまたいたぶって。

今度は、勝手に自殺する秋川の責任までとれだと？

ふざけるな。

本当に死ぬ気もないくせに。

このあと、どうなってもかまうもんか。

勝手にしろ！

「いいんじゃない？」

自分でも思わなかったほど、強い声が出た。

「な……」

秋川は電話の向こうでただ絶句している。

「あんたが自殺することに、どうして僕が罪悪感を抱いたり悲しんだりしなきゃならないんだ？ 控えめにいって、僕にとってあんたの存在はゴミ以下なんだ。どうぞご自由に。僕があんた達にいわれた言葉を、そっくりそのままお返しするよ」

「待つ…」

皆までいわず、受話器をたたきつけた。

電話を切ってから、急に不安が押し寄せてきた。思わずあんな言葉を言ってしまったし、それはほとんど正しかったけれど、それでもどこかひっかかる。

少し考えて、僕は有坂の家に電話をかけた。

「私のところにも、同じ電話がかかってきたの」

「どうしたらいいと思う？」 不安げな声が聞こえる。

「どうもしなくていいんじゃないかな？」

「やっぱり？」

「うん。秋川に死ぬ気はないと思う。本当に死にたいのなら、その前に僕たちを呼び出すなんてことはしないと思う。呼び出して、僕たちが来たのならともかく、来なかったら当てつけで死ぬこともできない。明日僕たちが電話のことを言ったら、大恥をかくしね。もし本当にやる気があるなら、遺書だけ残して人のいないところで死ぬか、逆に全校生徒の前で僕らを責めて、そのあとで死ぬか、どっちかだと思うよ」

「じゃあ、何のために呼び出したの？」

「たぶんあの電話のそばには宮野たちもいると思うよ。偽の電話で呼び出して、どうせまたいじめるつもりなんだろう。だから、絶対にいけないでね。…心配だから」

「…うん」

返事が来るまでに、若干時間がかかった。

どうやら有坂は、秋川が死ぬと言ったことに、少し罪悪感を感じたらしい。

「そんなに落ち込まなくてもいいよ。どうせ脅しだよ」

そうやって慰めたものの、最後まで有坂が元気になることはなかった。

受話器を置くと、またさっきの考えが頭の隅をよぎった。確かに、秋川の行動はおかしい。

ぐるぐると頭の中でいろんな考えが渦巻いたが、あまり役に立つ考えがあるとは思えなかった。

僕はあきらめて寝ることにした。明日になれば、良い考えが浮かぶこともあるだろう。今日はいろいろなことがあった。ゆっくり休んだほうがいい。

眠りに落ちるとき、一瞬だけ有坂の顔が浮かんた。

第十一話 氷雨

次の日は雨だった。低くたれ込める灰色の空から、銀色の雨の線が何千と流れ下る、そんな日だった。

冬の雨は嫌いだ。ただ冷たくて、体の芯からぬくもりを奪い取る。ひとが、生きていくのささいやになりそうな、そんな陰鬱な日。せめて、雪ならよかったのに。雪なら積もれば、この世のすべてを覆い隠すこともできるだろうから。けれど現実には、この世は雨によって閉ざされている。

有坂の家へ寄ったが、有坂はもう出かけたそうだ。今日は係の仕事があるらしくて、僕が来たらそう伝えてくれるように頼んだという。

だったらしかたがない。僕は有坂の母に礼を言つと、学校へ向かって歩き出した。少しだけ残念だ。

教室に入ると、沈黙が広がるはずだった。けれど、この日はいつもとは違っていた。

みんなは前のように、いや、もっと興奮して、何かを話し合っている。

なにかあったのだろう。でも、いったいなにが？

「すごかったってさ、ビルの下に、秋川の死体があつて……」

「なんか、頭から飛び降りたらしくて。顔とかぐちゃぐちゃで、だれだかわかんないくらいだったんだって」

秋川が死んだって？

「それ、ほんとか？」

思わず近くにいたやつに詰め寄る。

「ああ。木田の後追いつてうわさだけど…」

おびえたように後ずさるそいつを問いつめることはせず、あたりのみんなの反応を見る。

今まで話していたみんなが、一斉にこちらを向いていた。その顔には、紛れもない怯えがある。

ということは…

有坂の席をみる。

投げ出された鞆。

何があつたのかは、すぐにわかった。

急いで教室を出る。

何とかしないと。どんな気持ちで、あいつらの言うことを聞いたんだろう？

靴を履き替え、傘をつかんでそのまま走る。

差した傘はじゃまだから。たたんでしまった。すぐに、雨滴が目にかかる。容赦なく降り続く雨が、体から精気を奪っていく。ぺつたりと張り付いたシャツが気持ち悪いし、凍り付きそうに寒い。

それでも僕は、有坂を捜し続けた。

どこだ。どこにいる。

商店街。駅前。通学路。

そのときふと、ある光景が浮かんた。おとつい夜の、あの光景。あのときのことを、向こうも大切だと思っているなら…

公園の入り口をくぐる。

有坂はそこにいた。氷雨の中、傘も差さずにベンチに座っていた。雨の中でふるえる有坂は、頼りなげで、はかなげで、さわつたらそのまま崩れそうに見えた。そしてそのまま、雨にただ打たれていた。

制服はもうびしょぬれで、髪や服の端から滴が滝のように流れていた。

そこにいる彼女は、初めて屋上であつたときの彼女とは違っていた。おとつい公園であつたのとも、あの日に、屋上の鍵を奪われた日の彼女とも違っていた。

そこにいる彼女は、ただおびえてうずくまっていた。そんな彼女を、みていたくはなかった。

だから、声をかけた。

「有坂さん」

すると、彼女がゆつくりと顔を上げた。

「黒川君…」

「きて、くれたんだ…」

そういうと、彼女はかすかにほえんだ。

「きてくれたんだ、じゃないよ！ずぶぬれじゃないか！ほら、傘持ってきたから。帰ろう」

そういうと、有坂はゆつくりと首を振った。

「いやだよ…。ここにずっと、このまみたい…」

「たぶんそういうんじゃないかと思ったんだ。でもだめだよ。このままだと、倒れちゃうよ」

「別にいいよ」

「でも…」

言いかけて、気づいた。おとつい夜のぼくと同じだ。

たぶん彼女は、本当にここから離れたくないんだ。

どうして？自分を寒さの中に包み込んでしまえるから。自分が、このまま消えてしまえるように思えるから。

だから…。

「ここ、すわってもいいかな」

「うん」

「僕がいるとじゃま？」

「ううん、そんなことない。でも…」

「いいから」

強引に座ると、傘を彼女の上にさした。

やがて、彼女はぽつりぽつりと話し始めた。

「教室に入るとね、何にも声がしないの。なあんにも。それで、みんなこつちをみて、ひそひそはなすの。どうしたのかって思ったわ。そのうち、宮野さんががまんできなくなったみたいで、こつちにきてね。」

「どうして秋川を殺したのよ」って。

「どうして秋川の電話の時、行って止めなかったのよ」って。

わたしね、黒川君の気持ち、初めてわかった。確かに黒川君にはいいたくないよ。おとつい、あんなにえらそうなことだったのにな。でも…」

有坂の泣き顔を見るのは、これで何度目になるだろう。

そつと手を伸ばした。

細い肩を引き寄せると、有坂の頭が胸の中に収まった。

「だいじょうぶ。これから、ずつとそばにいるから。どんなことがあっても、有坂の味方だよ」そんなせりふが喉元まででかかったけれど、自制した。

代わりに、有坂がこれ以上雨に濡れないように、彼女の体を抱え込むように強く抱きしめた。

あの日あんなに暖かったのに、有坂の体は冷え切っていた。まだ息をしているのが不思議なくらいに思えた。だから有坂が暖まるまで、ずつと抱いていた。

十分ぐらいそうしていると、だんだん有坂の泣き声が小さくなってくるのがわかった。

「落ち着いた？」

「うん、なんとか。ありがとう…」

「じゃあ、家まで送るよ。どっちにしろ、学校へはもう行けないだろうし。荷物は明日とってこよう」

「黒川君はどうするの？」

「僕も今日は帰るよ。教室を飛び出して来ちゃったからね。いまさら戻れないと思う」

僕がそういうと、彼女は小さくほほえんだ。

それはほんのかすかなものだったけど、僕には十分だった。

第十二話 有坂の場所

有坂を家へと送ると、僕は帰ろうとした。

けれど、有坂に呼び止められた。

「あがつていつてよ」

「わるいよ、そんな…」

「黒川君もずぶぬれじゃない。風邪ひいちゃうよ」

「いや、でも…」

「これぐらいさせてよ。それぐらいのことはしてもらってるよ」

「…それじゃ」

結局、有坂の言葉に甘えて、家へと上がらせてもらうことにした。

玄関前の階段を、有坂の後ろについて歩く。

階段を上りきると、熊の絵を描いたボードに、「優樹の部屋」と書かれている。

「さ、どうぞ」

有坂について、部屋へとはいる。

有坂の部屋は、暖色系に統一してあって、居心地は悪くなさそうに見える。でもそれは、僕には何か、自分の紡ぎだした糸の中眠る蚕を思わせるものだった。

たぶん、この中だけが、有坂にとっての居場所だったのだろう。

それは僕と変わりなかった。中にはいるのが、ちよっと後ろめたいが、すぐにあることに気づいて、おかしくなった。

「どうしたの？」

様子が変わったのに気づいたらしい。

「有坂さんの場所にはいるのは、これで二度目だな、と思って」

有坂の表情がゆるんだ。

「一回目は不法侵入だったから、堂々とはいるのはこれが初めてよね」

有坂は、タンスからバスタオルを取り出すと僕に渡した。

「とりあえず、これでふいて。そのあとですぐお風呂に入ってね」

「有坂さんはどうするの？」

「私は黒川君が入った後で…」

「だめだめ、有坂さんが先に入らなきゃ。大丈夫だよ、ここは暖房も効いてるし」

有坂はしばらく躊躇していたけれど、僕が有坂さんのあとじゃなきゃ絶対はいらないと強くいうと、しぶしぶ折れた。

有坂がいない間に、部屋を見回す。いけないことだとは思っただけれど、間が持たないし、有坂がどんな暮らしをしているかにも興味はあった。

あたりを見渡すと、きれいな石があちらこちらに散らばっていた。石といっても、宝石屋よりショッピングモールの石屋に売っているような、どちらかといえばあまり高価でなさそうなものが多かった。

本棚には、少女漫画や少女小説、他の漫画や小説もあった。

一冊の本に手を伸ばす。確か、クラスの女子が何人か持っていた、最近人気のファンタジーだ。普通の女の子が異世界にとばされて、伝説の勇者として戦う話だった。

しばらくして、有坂が風呂から上がった。

「じゃあ、次どうぞ」

「ありがと。じゃあ、遠慮なく入らせてもらっよう」

風呂はちょうどいい暖かさになっていて、冷え切った体を十分に温め、リラックスすることができた。

浴槽につかりながら、僕は有坂のことを思った。

最近、有坂の泣き顔ばかり見るような気がする。昔はそんなことなかった。有坂はいつでも無表情で、いじめられているときでもず

つとその顔のままでいた。

今ならわかる。あれは自分を守るために、心をずっと奥の方へしまい込んでいたんだ。

だから僕と会って、心を隠す必要がなくなってから。有坂は、歯止めが利かなくなった。

今まで表に出すことに慣れていなかった心が、そのままでてくるようになったんだ。

だから…

有坂は、本当にきれいになった。と、僕は思う。

会ったとき無表情だった顔に、表情があらわれるようになった。笑ったり、怒ったり、泣いたり、くるくると変わる表情。見ていて飽きないし、時々はつとするほど大人っぽい顔をする。

もしいじめが終わったら、有坂はどうするんだろう。たぶん、また前と同じように、みんなと笑って、楽しく過ごしていくのだろう。僕はだめだ。しばらく人と話はしたくない。正直、もううんざりだ。誰にも邪魔さえされなければ、教室の片隅でじっとしているだけいい。

でもそのとき、笑っている有坂を、僕は笑ってみることができただろうか。

ひとつ頭を降って、今の考えを追い払う。いくら何でも先走りすぎる。今必要なのは、いじめから抜け出すための方法なのだ。

風呂から上がると、有坂がシャツとズボンを貸してくれた。有坂の父親のものらしく、僕が着るとかなり余った。

柔らかい、ピンクのクッションの上にすわって、僕たちは話をし

た。

といつても、自然と話は事件のことになった。

有坂は、あるとき秋川のところに行かなかったことを、気に病んでいるようだ。

「あるとき、秋川さんのところにいつてたら、自殺は止められたの？」

「そんなことないよ」

僕は即座に答えた。

「でも、どうして？」

「里中さん達に言われたの。あるとき私があそこについていれば、秋川さんは死なずにすんだのにつて。わたしが、」

そこで、有坂は言葉に詰まった。

「私が秋川さんを殺したんだつて。みんなの前で、大きな声で決めつけられて。耐えられなくなつて。なんでそんなこといわれなきやいけないのかわからなくて。でも、確かに最後に電話をもらったのは私で……」

いろんな感情が渦巻いていて、とてもうまく話せないみたいだ。握りしめた手がふるえている。

「気にすることないよ」

できるだけ、優しい声で言う。

「あいつは、自分が死ぬことを有坂に印象づけたかったただけだよ。こう言つちやなんだけど、有坂さんや僕が説得したところで、あいつが言うことを聞くとする？」

「でも……」

「だいたい、卑怯だよ、あいつ」

「卑怯？」

「だつてそうだろ？生きてる間はさんざんいじめておいてさ、死ぬときにはそんな電話かけて、有坂が悪いんだと思いこませて、自分はさつさと死んじゃう。呪いがかけられたようなもんだよ。あい

つは死んでからも、有坂を支配していたかったんだ。有坂を苦しめて、縛り付けていたかったんだよ！」

言っているうちに、怒りがこみ上げてきた。

「僕は秋川を絶対許さないよ。なにがあるうとね。そこまで都合よく利用されちゃ、たまらない。あいつは一人で、勝手に死んだんだ。…有坂さんが気にすることはない。全部あいつが悪いんだから」

言いかけて、あることに気づく。ふつと言葉がとぎれた。

少しだけ昔の光景。今も机に残る、僕の遺書。

自分の命と引き替えに、相手を呪う僕の姿。

結局のところ、秋川のやったことと僕がやるうとしたことに、どれだけの違いがあるだろう？

「ありがとう…」

だから、そういつてくれる有坂の言葉が、ただうれしかった。

「ひとつ頼みたいことがあるんだけど」

しばらくしてから、僕はそうきりだした。

「なに？」

「木田があの日何をしてたか、調べてくれない？僕は代わりに、昨日秋川が何をしてたのか調べてみるよ」

有坂が、不思議そうな目で僕を見つめる。

「有坂さんの事件と僕の事件と、全く関係ないとは思えないんだよね。こんな短い時期に、同じクラスで二人も死ぬなんて、偶然とは考えにくい。それに、死んだやつの立場も状況も似てるし。『容疑者』の立場もね」

「秋川さんが誰かに殺されたって言うの？」

「少なくとも、警察は疑うと思うよ。木田の場合は疑う理由がなかったけど、今度は不自然すぎる」

「だって、私たちのところにかかってきた電話は？」

「けど、それだけで自殺って決めつけるわけにもいかないよ。殺したやつに、無理に言わされたのかもしれないし。とにかく、一通り調べてみた方がいいと思うんだ」

僕がそういうと、有坂は不思議そうな目で、じつと僕を見た。

「どうして？どうして黒川君、こんなにしてくれるの？」

それを聞いて、僕にはわかった。

有坂も、ぼくとおなじ。だれかとかかわるのがこわくて、自分には何の価値もないと思いこんで。

そうやって、自分を守ろうとしていたんだね。

一昨日までの僕と同じように。

あのときは、有坂がそばにいてくれた。今度は、僕の番。前、有坂からもらったもの、今度は僕が君にあげるよ。

「どうしてか、本当にわからない？」

まっすぐに有坂を見つめる。有坂は少し視線をはずした。

「おとついのことは、覚えてる？」

彼女が息をのむ音が聞こえた。

「うん……」

「だからだよ。あのとき、僕がどれだけうれしかったか、きつとわからないだろうけど。」

でも、僕のこと誰かに泣いてもらったのなんて、初めてだったんだ……」

そういつて、有坂の手を取る。

沈黙。

やがて、有坂が目をそつとつぶった。

一瞬だけ唇がふれあい、すぐに離れた。

頬に血が上る感覚がした。目を開けると、有坂の顔も真っ赤だっ

た。

そのまま有坂を抱きしめる。有坂の鼓動が聞こえる。きっと僕の心臓もやかましく動いているのだろう。

少したってから、体を離す。本当はこのまま抱いてしまいたかったが、寸前で思いとどまった。

何か気の利いたことをいいたかった。けれど僕の唇からは、たった一言、

「好きだよ」

それでも、有坂の顔が、ぱつと輝いた。

「うん、私も好きだよ」そういつて笑った彼女の顔は、今まで見たどんな有坂よりも、きれいだった。

第十三話 二度目の葬式

「黒川君、好きだよ…」

そういつて、有坂の顔が迫ってくる。その華奢な体を抱きしめて、僕は…

といったところで、目が覚めた。

「夢か…」

そうつぶやいてから、きのうの出来事を思い出す。とたんに顔に血が上った。

頭を降ってその考えを追い払い、僕は葬式に出るために着替えを始めた。

昨日からの雨はやんだものの、まだどんよりとした雲が空にかかっていた。

秋川の葬式には、やっぱり多くの人が詰めかけた。前の学校からの参列者は少なく、どちらかといえばつきあい…同じクラスや部活の子が目立つ。

泣いている子はいなかった。里中や岸も、ないてはおらず、そのかわり有坂にかみつきそうな目を向けていた。

「今日の新聞は見た？」

隣の有坂に話しかける。

「うん。確か、自殺だっていつてたよね」

今日の新聞は、どこも三面にでかかどこの事件のことが書かれていた。

「確か、死亡推定時刻は十時過ぎだったよね」

「でも、それ以外にこれといった記事は載ってなかったね」

「昨日、警察は来た？」

「ううん、こなかった。絶対にくると思ってたのに」

それだけじゃない。今日は、みんなから非難されるとばかり思ってたのに、誰からも、何もいってこない。里中や岸も、高原や佐久間も、こちらをにらみつけるだけで、沈黙を保っている。なにかあったにちがいない。たぶん、有坂になにもいえなくなるようななにかが。

雑踏をかき分けながら、一人の男がこちらへと向かってくる。中山だ。

「やあ、その節はどうも」

僕は有坂を促し、無視して立ち去ろうとした。

が、中山はそんなことにはお構いなしに、つきまどってきた。

「今度のことについて、話を聞きたいんだけど」
ずうずうしいにもほどがある。

しかし、僕は彼の方に向き直った。

「どんな話ですか？」

「まあ、いろいろとね。この前自殺した木田君と、今度自殺した子の関係とか」

「いいですけど、今度はそちらが知っていることを聞いてからですよ」

「…まだ、探偵ごっこを続けてるのか？」

「ええ。やめる理由がないもので」

「そういうことはプロに任せろ…っていつでも無理か。とすると、話すことはなにもなさそうだな」

そういうと、中山はやけにあっさりときびすを返した。

「じゃあ、ひとつだけ聞きたいんですが」

僕の声にも、中山は面倒くさそうに返事をしない。かまわず続けた。

「自殺らしきものが二件も立て続けに起こってますけど、警察はどう思ってるんでしょう？」

「それはすぐにわかるよ」

そういうと、中山は僕のうしろを指し示した。そこには、厳しい顔をした警官がたっていた。

「黒川耕平君と、有坂優樹さんだね？」

「少し話を聞かせてもらえるかな？」

男は、県警の島だと名乗った。

「いったい何のご用でしょう？」

そういいながら、有坂の半歩前にでる。

「いや、ちよつとしたことだよ。一昨日死んだ女の子…秋川さんのことについて聞きたいんだが」

「わかりました」

「きみたちは、秋川さんと仲がよかったんだってね」

「だれがそんなことを？」

「クラスの子達だよ。里中…とかいう名前の子だ」

いかにも里中のいいそうなことだ。ここで何か僕らがぼろを出すことを期待しているのかもしれない。

「秋川さんが死んだとき、何か変わった様子はなかったかね？」

「そうですね…確かに少し気が立っていたようなところはありませんでした」

「確かにずいぶんといらついた様子でしたけど」

まさか、本人から電話がかかってきたなんていえない。

「どうしてかはわかるかい？」

「やっぱり、木田君が死んだからだと思います」

「そうか」

そのことについて何かつっこまれると思ったが、刑事はあっさりと話題を変えた。

「じゃあ、二、三ヶ月前は？秋川さんに何か変わったことはなかった？」

二、三ヶ月前？

「いえ、わかりません」

有坂の方を見ると、彼女も首を振っていた。

「どんな小さなことでもいいんだけど」

「そういわれても……」

何とか思い出そうとはしてみたが、特に思い当たるところはない。そう刑事に伝えると、彼はまた話題を変えた。

「それから、木田君が死んだときなんだけど」

その言葉に、僕は少し緊張した。まあ、これだけ短い間に、同じクラスの生徒が二人も死んだのだ。関連づけて考えない方がどうかしている。そう思つて、気分を落ち着かす。

「どうして屋上に上ったのか、理由を知らないかね？自殺するんだつたら、他にいくらでもできるところがあるのに、何でわざわざ学校に忍び込んでまで、屋上にこだわつたんだろう？」

「自殺した理由もわからないのに、死に場所にこだわつた理由なんてわかるわけじゃないですか」

「どうやって屋上に上ったのか、わからないかね？先生達の話では、あの屋上には普段は鍵がかかつてるそうだ。けれどあの日に限つて鍵が開いていて、そこから飛び降りた……ちよつと不自然じゃないか？」

どうしようか？一瞬だけ、僕は迷つた。ここでどうして木田が鍵を持っていたか話せば、必ずいじめのこともはなさねばならないだろう。そうすれば、間違いなく僕は容疑者の一人として疑われることになる。それも、一番疑わしい容疑者だ。

けれどここで話さなかった場合、もし高原達が鍵のことを言っていたら、どうなる？

僕への疑いが、さらに強くなるだけだ。高原達がいじめのことを言わなかったとしても、クラスの誰かがこれからそのことを言ったら？しかし、ここで迷ったこと自体で、もう何か知っていると云っているようなものだという事に気がついた。だから、しかたなく鍵のことだけ話し、その後を嘘で固めることにした。

「あそこの鍵は、僕が持っていたんです。ときたま一人になるのに、ちようどよかったから。ただそれを、木田が知って、貸してくれと頼まれたんです。一回ぐらいならいいかと思って、OKしたんですけれども」

そういうと、警官はうなずいた。

「ああ、それで職員室の鍵はそのままだったんだな」

「それにしても、何で合い鍵なんか持っていたんだ？」

たぶん来ると思っていたこの質問に、僕は笑顔で答えた。

「あまり大きな声ではいえないんですけど…」

わざと声を潜め、明るくいった。

「お巡りさんは、子供の頃秘密基地を作ってみたと思ったことはありませんか？」と。

島は破顔して、うなずいた。どうやら納得したらしい。

「ところで」今度は、こちらから質問してみる。

「警察が来たってことは、秋川はやっぱり殺されたんですか？」

この質問に、警官が渋い顔をした。

やっぱり、無理か。まあ、こんなのでうまくいくとははじめから思っていない。

「それはまだなんともいえないな。そのために調査をしているわけだしね」

予想通りの答えが返ってきた。

「木田の自殺との間に何か関係があるんですか？」

その答えを無視して、ぼくはさらに聞いた。

「何か知っているのかね？」

島の目が光ったようだ。しまった、やぶへびだったか。

「いえ、ただ自殺が二回も続けて起こるなんて変だなと」

つまらない回答でお茶を濁す。

「中学生がそんなことに首を突っ込むんじゃない」

つまらない回答に、さらに輪をかけてつまらないアンサー。

「友達が二人も立て続けに死んだのに、ですか」

「友達」という言葉に引っかかりを感じつつ、とりあえず反撃してみる。

「だからって、おもしろ半分にやっていいことじゃないぞ」というと、警官達はひきあげていった。

記者に続き、警察に聞いてみるという案もあえなくつぶれた。まあ、最初から期待してはいなかったけど。

まあ、木田と秋川の死を警察が関連づけて考えていることがわかっただけでもいいんだろうか？

あれこれ考えていると、有坂に肩をつつかれた。

「なんだか、記者の人がみんな帰って行くんだけど」

言われて気がついた。あんなに大勢いた記者が、今では十人くらいにまで減っている。

記者が帰るということは、取材が終わったのか、取材をする必要が無くなったのか。取材がこんなに早く終わるとも考えにくいから、取材をする必要がないということ。つまり、自殺の可能性が高いということだろう。しかしなぜ、マスコミはそう考えたのだろう？

考えながら歩いていると、長谷部を見つけた。何人かと話をしてる。

やがてそれが終わった彼は僕たちに気がついた。

あいさつもそこそこに、秋川の死について、なぜみんなの態度が

変わったのかを聞いてみる。

長谷部は、少しためらった。

「ほんとに知らないのか？すごいわきになってるのに」

「なにが？」

「秋川が妊娠してたってこと」

「ええっ！」

「学校も、秋川の親も認めてないけど、みんな知ってる。だから、秋川が木田の後追いで自殺をしたんだと、みんな信じたわけだ。警察の捜査もおざなりだっただろ？」

「その子供は、木田の子供だったの？」

「他に考えられないだろ」

「いや、たとえばさ、別の人と秋川との間で何かあったのかもしれないし」

「ふたまたとか？」

「それもあるけど、もっと…ほら」

そこで長谷部は言葉を濁した。

「有坂さん、どう思う？」

「秋川さんが別の人とつきあっていて、それで口封じのために殺したってことは？」

「でも、それだと何ヶ月か前に何かがあったってことでしょ？そのころは、何にも変わった様子はなかったけど」

「とすると、なにもなかったんだろ？な。有坂さんは、いい悪いは別として秋川と関係が深かった。ほとんど毎日会ってたっていいもしい。その有坂さんがわからなかったっていうことは、相手は有坂さんが知ってる範囲の人で、秋川と普段から仲がよかった人ってことになる。高原とか佐久間とか、他に秋川と仲がよかった人かもしれないけれども、やっぱり木田が一番可能性が高いんじゃないかなあ」

「そのことを、秋川は知ってたのかな？」

「どうだろう…。死ぬ前の様子はどだった？」

「やっぱり、ちよつと様子はおかしかったわね」

そういつて、有坂が僕の方をちらつと見る。（あの電話のことだな）合点して、有坂にだけわかるように小さくうなずいた。

「だとしたら、知ってたのかもしれない。それで悲観して自殺すること、考えられる」

「でも、遺書は見つかってないんだろ？」

「見つかってなくても、状況としてそう考えるのが一番妥当だろう。別に遺書がなければ自殺しちゃいけないって訳でもないんだし」

そついうと、長谷部は別の方へと歩き出した。

「どんな結果がでるか、楽しみにしてるぜ」最後にそついい残して、彼は去つていつた。

「どうもあいつ、おもしろ半分だな。まあ、協力してくれるだけで大助かりだけど」

「そうだね」と、相づちを打とうとした有坂の表情が固まる。

「なにやってんのよ、有坂。秋川の葬式だつて言うのに、彼氏と来てるなんて。あんたが殺したようなもんなのに」宮野だ。

「そうよ。秋川が死んでも、悲しくも何ともないんじゃない？」里中がいう。

「あんなにかわいがつてもらつたのに」岸の声にも、一見非難がにじんでいる。

でも、こいつらの顔におびえがないことに、僕は気づいた。目の奥が、冷やかに笑っていることに。

有坂は、じつとつむいて耐えている。握りしめた手がぶるぶると震えている。その手のふるえが宮野たちに見えないように一歩前へ進んでから、話題を変える。

「宮野たちは、昨日はいつたい何してたんだ？」

「どうしてそんなこと聞くのよ」

宮野の反応は素っ気ない。

「有坂ばかりを非難するのはちょっと。ずっと秋川と長いこと一緒にいたのは、宮野だろ？」

「あたし達を疑ってるの？おあいにくさま。あたしはあの日は十時まで塾にいたの。里中也岸も同じ塾にいたから。秋川を殺すことなんてできる訳ないでしょ」

心の中で、何かが引つかかった。

「だいたい、あんた達以外に秋川や木田を殺す動機がある人なんかいないじゃない」

さっきの引つかかりは、しかしその一言で心をすり抜けていった。「犯人を捜すポーズなんかしたって、だまされないわよ。警察に捕まるまで、そうやって自分たちだけごまかしていればいいんだわ」
「行こう、有坂」

そういつて、身を翻す。有坂も、あわてたようについてきた。後ろで宮野が何か言っているようだったが、無視することにした。そんなことよりも、有坂を落ち着かせることが先決だった。

第十四話 デート

葬式の後、僕は有坂を帰して、木田の家へと行くことにした。

「私も行った方がいい？」

「いや。僕が木田に借りてたものを返してもらうんだから、有坂さんとは関係ないし。だから、いいよ。何かあったら連絡するから」

「気をつけてね」

心配そうな有坂に軽く手を振って、木田の家へと向かった。

木田の家につくと、秋川の母親がそこにいた。

何かもめているようだ。秋川の母親が、憤然としてでてくるのが見えた。

「どうしたんですか？」

「ああ、なんでもないのよ」

何でもないはずはないが、僕はあえて無視した。想像できないこともない。

用件を言つと、木田の母親はすぐに僕を家に入れてくれた。

礼を言つて、勝手知ったる…あまり知りたくもなかったけど…他人の家へと上がる。

玄関先の花瓶に生けてある、菊の花束に気がついた。

「この花は、木田君が持ってきた花ですか？」

「ええ」

なんだか、地味な花束だ。彼女に送ったとしても、あまり喜ばれそつには思えない。

「どうしてこんな花を買ってきたんでしょう？」

「さあ…」

木田の母親も、見当が付かないようだ。

断りをいれて、木田の部屋にあがる。

木田の部屋はきちんと整えられていた。前に僕が来たときそのままだ。まるで、今でもあいつが生きていて、そこからひょっこりと顔を出すような気さえしてくる。

取り上げられたものはすぐに見つかった。他にもたくさんあったけれども、あまり多すぎると不審に思われる。どうしても取り返したいものしかだめだった。

それが終わると、じつくりと彼の部屋を探し始めた。

日記みたいなものは残っていないだろうか。それでなくとも、何か手がかりになるようなものが。

手帳が見つかった。なにげない風を装って開いてみる。

木田の、割と几帳面な性格のせいか、けっこういろいろなことが書いてある。

読んでいるうちに、何かおかしな気分がした。

もう一度、そこを読み直す。

（十二月十日、遊園地へ行く予定）

…？

そんなばかな。あいつが死んだのは、十二月の七日だ。なんで、自殺した後の予定が書いてある？

手帳を懷に忍ばせると、僕は退散することにした。

「探し物は見つかった？」

「はい、おかげさまで。ありがとございました」
そういうと、立ち上がって帰り支度を始める。

「これからも、たまにはきてちょうだいね。その方が、あの子も喜ぶだろうから」

その声と、

「冗談じゃないわ！」

という声は、ほぼ同時に聞こえた。

叫んだのは、木田の姉らしい、僕より二、三歳年上の女の人だった。

「こいつが、こいつが隆史を……」

「志緒理！」

母親のたしなめる声も、彼女には届いていないようだ。

「お母さんは、あの噂は知ってるでしょう？ 隆史は、殺されたんだって。殺す動機があるのは、こいつだけだって」

彼女は、さらに僕を責め続けた。

「覚えてなさいよ。絶対に許さないから！」

その声から逃げるように、木田のうちをでた。もう、ここにくることもないだろう。

木田の家をでて、角を曲がると、ふいに見知った顔に出会った。
有坂だ。

「ずっと待ってたの？」

「うん」

「ごめん、もっと早くでてくればよかったね」

「ううん、いいの。こっちが勝手に待ってたんだし」

「でも、寒かっただろ？どこかで暖かいものでも食べてこよう。なにがいい？」

結局、近くのファーストフードの店にはいることにした。

有坂がハンバーガーセット、僕がフィッシュバーガーセットを頼み、窓際に座る。

「何かわかった？」

「うん、すごいことがわかったよ」

そういつて、僕は木田の家でわかったことを有坂に伝えた。

「ということは……木田君は、自殺じゃなかったってこと？」

「その可能性は大きいと思う。これから自殺するやつが、その後の予定を手帳に書いたりはいしないよ。ただ、あれを書いたあとに突然死にたくなつたのかもしれないよね」

「とすれば、そのあとに、木田君が自殺を決意するような何かがあつたってこと？」

「そういうことも考えられるってとき。実際にはそんなことはないだろうね。もしそんなことがあつたのなら、噂にならないはずがないよ。そうでなくても、少なくとも僕はあいつの様子がおかしいことに気づいてなくちゃならない。でも、そんな話はどこからもでてこないし、別にあいつの様子がおかしかった記憶もないけど」

「ということは、誰か他に犯人がいるってことだよな」

「僕が夢遊病とかじゃなければね」

「でも、いったいだれが？」

「それはわからない。ただ、殺すくらいあいつと関わりが深かつたやつというと、そんなにはいないと思う。そのあたりから調べべきだろうね」

「これからどうするの？」

「僕たち以外で木田を殺しそうなやつを捜してみよう。けれど、今日は……」

「今日は？」

「さしあたり、一緒に帰ろうか」

横を歩く有坂の顔をちよつと見る。

有坂は少し顔を赤らめ、「うん！」と、元気にいった。

商店街は、クリスマスを控えていつもよりさらににぎわっていた。イルミネーションが町中に張り巡らされ、浮かれた人が町へと繰り出す。

そんな光景は、見ているだけで楽しくなってくるようなものだった。

「ね、あれかわいい!」

そういつて有坂が指さしたのは、色とりどりの石が並んだ店の、小さなローズクォーツのボールだった。

「有坂さん、ああいうの好きなの?」

「うん。だつてきれいじゃない?」

たしかに、女の子は好きそうな気はする。

僕は何気なく値段を見てみた。

「意外と安いんだね」

五百円と書かれた石を見ながら、つぶやく。

「うん。お金ができたら、絶対買おうと思って」

お金ができたらつてほどの額じゃないと思うけれど…

「買つてあげようか?」思わず、口に出していた。

「いいの?」

「これくらいだったら、いいよ。かわいい彼女のためだし」

言つたとたん、顔が真っ赤になった。有坂を見ると、彼女も顔を赤らめている。

「じゃ、じゃあ、買つてきたら?」そういつて、お金を渡す。

「プレゼントなんですよ?」

「うん」

「じゃあ、ちゃんと渡してほしいな」

「ちょ、ちょっと待つてよ。このなかにはいつて買つてこいと?」

「がんばつてね」につこりと、有坂にほえまれる。

店の中には、女の子達が何組もいる。ちょっと男一人ではつらそう…というか、つらい。

でも、確かに手渡しはしたい。

覚悟を決めて、僕は店の中へと入った。

目当ての品をひつつかんで、一目散にレジへと向かう。

「ラッピングはどうされますか?」

「お…おねがいします」

ラッピングをしてもらっている間も、あたりの視線が気になってしょうがなかった。くそ。こんな店、二度と来ないぞ。

かわいいラッピングの箱を持って、すぐに店を出た。

店の前で待っている彼女に渡す。

「これ」恥ずかしくて、少しぶっきらぼうな渡し方になってしまった。

それでも彼女は、喜んでくれた。

「ありがとう。たいせつにするね」

無邪気に喜ぶ有坂を見ると、さっきの気分も忘れてこちらもうれしくなる。

「こないいいものをもらったから、何かお返しをしないとね」

有坂が言った。

「実はこんな券があるんだけど」

そういつて有坂がさしだしたのは、この近くに最近できた遊園地のチケットだった。夜の十時まで営業していて、夜景を見に来るカップルも多い。

「よく手に入ったね」

「親がもらってきたの。ほんとあの日に行くつもりだったんだけど…」

そこまでいつて、有坂は顔を曇らせた。

有坂にも僕にも、あの日のことはタブーだった。

だから僕はすぐに話題を変えた。

「今日行っても、仕方がないんじゃないかな。今度の日曜日に、一緒に行かないか？」

有坂も、ほっとした表情でそれに乗った。

「うん。時間はどうしよう？」

「朝の十時に駅前で」

「わかった」

「それじゃ、また明日」

「ちよつとまって」帰りかけた有坂を呼び止める。

「何にもないけど、家にあがつてよ」

言つてから、僕が何かとんでもないことをいったことに気づいた。

「い、いや、変な意味じゃなくて、今は母さんか誰かいるはずだし、話したいこともあるし、その…」

しどろもどろの僕を見て、有坂は少し笑った。

「じゃあ、おじゃまさせてもらつてもいい？」

「へえ…こんなふうになつてゐるんだ」

僕の部屋を見て、有坂は歓声を上げた。

「男の子の部屋に入るのって、初めてだから」

「汚い部屋だろ？」

「ううん、そんなことないよ！考えてたよりも、ずつときれい！」

僕の部屋には、そんなに余分な物は置いていない。机と本棚、パソコンに洋服だんす、CDラジカセ。壁にはカレンダーが、ぼつんとかかっている。基本的に白と黒を中心に、無彩色でまとめた機能的な、と言うよりは無機質なカラーリングだ。

あまりごちゃごちゃしたのは好きじゃなかったから、これでよかった。

「でも、寂しい部屋だね」

「そうかな？」

「うん。あんまり人のおいがしない部屋だね」

確かに、そうかもしれない。

「なるべくひとりでいたかったから」

「ひとりで？」

僕の答えに、有坂が問い返した。穏やかな調子だが、声は笑っていない。

「いや…」

ひとりでも、いたくなかった。この部屋にも、いたくなかった。できればここからうんと遠くへ、だれもいないところへいききたかった。

ひよつとすると、僕さえいないようなところへ。

沈黙が降りた。それはほんの少しの間だけだったけど、永い、永い沈黙だった。

やがて、有坂がぼつりと言った。

「もしこれが終わったら、どうしたい？」

「どこかに行きたいな。なるべくひとのいないようなところ。見渡す限り山か、海か。」

とにかくそんなところ」

「そう…」

どことなく気落ちしたような声だった。

「有坂も来ないか？」

「え？」

「だれもいないところに、ふたりだけで。きっと楽しいよ。誰もいないようなところで、一緒に遊んで、…ずっと、話をしよう。だれにもじゃまされずに、思う存分。もう飽きて、話なんかしたくなるまで」

「うん、いきたいよ、私。絶対に」

有坂が、力を込めて断言する。

そのまま、ぎこちない雰囲気 flowed。

「お、お茶でも淹れるよ。なにがいい？」

「い、いや、べつになんでも…」

「じゃあ、紅茶にしよう。ちよつとまっててね」

そついうと、僕は急いで部屋を出た。

部屋を出ると、僕はひとつ大きなため息をついた。
あぶなかった。自分を押さえる自信がなかった。少し、頭を冷やした方がいい。

紅茶を淹れ、部屋へと戻る。

有坂は、まだぎこちない雰囲気のままだった。

事件の話をして、少しでも気を紛らした方がいいだろう。

「僕の方は何にも手がかりがなかった。そっちは？」

「うん。こっちななんにもない」

あの日、高原はいつも通りに塾にいたらしい。木田とは別の塾だが。唐沢はゲームセンターにいて、佐久間は家にずっといたらしい。それだけならアリバイにはならないが、その日彼の家には来客があった、そのお客がちゃんと覚えているはずだという。

これだけしっかりしたアリバイがあると、どうにもならない。

「また、ふりだしなあ……」つぶやいて、クッションにもたれかかる。ぽふつと情けない音を立てて、僕のかたちにクッションがへこむ。

「でも変じゃない？」

「どうして？」

「だって、平日の夜九時から十時頃よね。普通の中学生がそうそうアリバイを作れるような時間じゃないんじゃない？普通は家に帰ってる時間でしょう。それなのに、六人ともその日だけしっかりとしたアリバイがある」

言われてみれば、一理ある。

「でも、それだけじゃ証拠として無理があるよ」

「うん、でも、何となく気にならない？」

「まあね。何となく、以上ではないけど、調べてみてもいいかもしれない。どうせ手がかりもないんだし」

そういつて、僕は立ち上がった。

「もう、こんな時間になっちゃったし。今晚はこれでお開きにしよう」

第十五話 予兆

次の日の昼休み。僕は校舎裏で人を待っていた。

校舎裏の空き地。あいつらに何度も呼び出された場所だ。

そのときは、ただからだを縮こまらせて、嵐が去るのを待つしかなかった。

そのときとは立場が違う。今は人を呼び出して、じっくり話を聞くだけのこと。余裕はあるはずなのに、心は晴れない。その時よりもずっと、大きなものがかかっているから。

やがてむこうから、どことなくおどおどとした様子の男子がやってきた。僕が呼び出した一年生らしい。

長谷部から聞いた名前を頼りに、何人かに当たって聞きだした名前。

「浜中君…だっけ？」

声をかけると、その男子はびくつと体をふるわせた。

「いや、そんな緊張しなくてもいいから。ちよつと聞きたいことがあるだけで」

「な、何の用ですか？」

「おとつい、二年生の女の子が自殺したのは知ってるよね」

「…ええ」

「そのとき、彼女が病院に通ってたっていう噂について、よかつたら、きかせてくれないかな？」

「いや、知らないですよ、そんなこと」

そう言っではいるものの、彼の目の奥が輝いたのを僕は見逃さなかった。

「君が最初に噂を流したってことはわかってるよ。だいじょうぶ、誰にも君から聞いたことはばらさないから」

「本当ですか？」

もともとしゃべりたくてうずうずしていたのだろう、僕がうなずいたあと彼は得意げに話し始めた。

「僕は倉田病院の前に住んでるんですよ」

倉田病院とは、このあたりで古くからやっている産婦人科の名前だ。

「ちょうど、四日ぐらい前かなあ。僕が家の玄関の前まできたときに、うちの制服の女の子が病院から出てくるのに出くわして。その人はすぐに顔を伏せて逃げてったんですけど、顔はバッチリ見ましたし。で、誰なんだろうと思ってたら、二日後くらいに自殺しちゃったじゃないですか。もう僕びっくりしちゃって、すぐに刑事さんにいったんですよ。『あのひと、病院の前で見ました』って。刑事さんも驚いたみたいで、いろいろと聞かれました。ほんとにもう、なんかドラマみたいで……」

興奮してしゃべり続ける浜中。舌打ちしたい気分をこらえて、聞きたかったことを聞いてみる。

「それ、本当に自殺した女の子だったの？」

その質問に、浜中は気分を害したようだ。

「ほんとですよ！顔はバッチリ見ました。間違いようがないですよ！」

「わかった」

それ以上異議は挟まず、次の質問に移る。

「それ、いつ頃みんなに話したんだ？」

この問いに、浜中はきつぱりと答えた。

「死んだ人の写真をニュースで見てからだから、おとつい…葬式のすぐ前ですね」

「ありがとう。だいぶわかったよ」

そういつて、質問をうち切る。

まだ話したそうな浜中を無視して、足早に校舎へと向かった。

「どうだった？」

校舎の端から有坂が顔をのぞかせた。

「あの噂、やっぱり本当だったみたいだね。病院にも警察にも聞けないから、噂の出所を当たってみただけ。彼の話を聞いてから警察が動きを止めたわけだし、本当だと思ってもいいんじゃないか？」

「そっか…」

「有坂さんたちは、知らなかったの？」

「…私は知らなかったけど。宮野さんたちはどうかわかんない」
少し硬い声で、有坂が言った。

「うーん…」

これだけでは、正直言つてわからない。

「ね、これからどうするの？」有坂が、ふいに聞いてきた。

「とりあえず、木田の通つてた塾へ行こうと思う。あいつが死ぬ前、最後にいた場所だし。もう他にめばしいところは残ってないしね。何か新しいことがわかるかもしれない」

「なかなかうまくいかないね…」

「そうかな？だいたいいろんなことがわかったと思うよ。ただ、それが上手く結びつかないだけだね」

そのとき。

「おい、もうすぐ授業だぞ」

学年主任の小平だ。

慌てて教室に戻ろうとする僕たちに、彼はあきれたように言った。
「おまえたち、いつもここにいるな。今日は高原達はどうしたんだ？」

「えっ？」なんのことかわからず、聞き返す。

「あれ？おまえ、いつもあそこにいなかったか？」

そう言つて彼は階段の下の小部屋を指さした。

「いや、知らないですけど…」

このあたりは、教室に行くにも体育館や特別教室に行くにも通らない場所だから、ふだんからあまり人が来ない。もちろん僕も、ほとんど来たことなんかない。

「そういえば、あそこでおまえを見たことはなかったかな。…知らないのか？」

「なにがです？」

「木田達が、よくこの教室の中で集まってたんだよ」
知らない。

「それ、だいたいいつごろからかわかりますか？」

「ちょうど一ヶ月ぐらい前からかな。別に悪いことをしてたわけでもなさそうだったから、ほおっておいたんだけど」

最後の言葉は、割引いて考えることにしよう。あいつらが、先生の目に付くようなときに悪さをするはずもないから。

この部屋の前を通るやつというと…

あんまり人通りのないところだ。通るのは、この先の体育倉庫に用事のあるやつぐらい。とすると…

「有坂さん。各クラスの体育委員の表とか、どこにあるか知ってる？」

三人目で手応えがあった。二年五組の体育委員は、ちょうど五時間目に体育の授業がある関係で、昼休みによくここを通るといふ。その彼の口から、こんな言葉が飛び出したのだ。

「ああ、この間死んだ子のことか？よく覚えてるよ」

「どんな様子だった？」

「ひどかったよ」

彼はそういうと、顔をしかめた。

「一番弱そうな子を、みんなでよってたかっていじめてさ。ほら、なんだかひよろひよろの子」

佐久間だな。

「パシリもよくさせられてたしな」

「小平先生は特にひどいことはなかったっていったけど」

「あの人は悪い人じゃないけど、みたくものだけ見るから」

納得した僕は、礼を言っで別れた。

第十六話 解答

放課後、ちよつとだけ寄り道をした。

繁華街の片隅にある小さな塾。木田の通っていた塾だ。

チャイムを押すと、五十歳くらいの体格のよい男性が出てきた。

「塾の見学をしたいってのは、君かい？」

見も知らない子供が押し掛けてきて、いきなり木田の様子なんか聞いたら、相手にされないことは目に見えている。

だから、ちよつと搦め手を使うことにしたのだ。

「はい、そうです」

少しだけ良心がうずいたが、無視することにした。

塾についての説明を受けながら、辺りを見回す。

窓際、前から二番目の机の上に、菊の花をいけた花瓶が飾っていた。つた。

「あの花瓶は何ですか？」

そう尋ねると、彼は顔を曇らせた。

「ああ、それは、この塾に通っていた子が自殺しちゃってね。喪中の間だけでも飾っておこうかと思って」

新入生が見学に来るなんてときは、普通はそういったものは隠したりすると思うのだが、ここはちゃんと花瓶を置いたままにして死者を悼んでいる。

ここの塾長の人柄がわかるような気がした。

まあ、どちらにせよこちらには好都合だ。

「あの子はいつも座る場所が決まっていたから、その場所に飾っておこうと思って」

塾の先生の声を聞きながら、そのあたりを見て回る。

机の中を見たのは、本当に何気なくだった。

「あれ、なにかありますよ」

僕の声に、先生は驚いたようだった。

机の中に、白い紙が転がっていたのだ。

その紙を引き出す。

クラスの中に、驚愕が声もなく広がったのがわかった。

それは、白い半紙に筆ペンで書かれていた。その紙には、新聞で見たのと同じ内容。

遺書だった。たぶん下書きだったのだろう、くしゃくしゃに丸めてはあったが、紛れもなく木田の字だった。

そして、文の最後に目をやったとき。

「!？」

そこには、紛れもない僕の名前が、しっかりと書き込んであったのだ。

その後は大変だった。警察まで呼ばれかけたが、何とか思いとどまってもらった。塾のコピー機でコピーをとらせてもらうと、僕は退散することにした。

家に帰ってから、あの遺書を広げてみた。

何度見返してみても、それはやっぱり僕の名前だった。

でも、筆跡は僕じゃない。きれいに整った字。木田の字だ。

これはたぶん、木田が実際に使った遺書と同じものだろう。それはわかる。

けれど、何で僕の名前が書いてあるんだろうか？

ふいに、思い出したこと。何かの本で読んだ、十年以上も昔の事件。

確か本棚に今でも置いてあったはずだ。

僕はその本を取りだし…そして、すべてがわかった。

この事件が、どのようにして起こったか。誰が犯人で、どのようにして殺したか。

そのとき、自分でも理解できないほど凶暴な感情が鎌首をもたげた。

我慢できなかった。こんなことを考えついたやつらを死ぬほど後悔させてやりたかった。

はいつくばらせてやる。生まれてきたことを後悔するくらい、完膚無きまでに叩きのめす。僕を甘く見ていたことを、思い知らせてやる。

これでこの事件は解決した。と、そのとき僕は考えていた。

後から考えると、このときの答えは七十五点、といったところだと思う。まあ、悪くはないだろう。

ただ、いくらいいい点を取ったとしても、合格点に届かない限り全く意味はない。

このときの答えに、本当に意味はあったのだろうか。
あのときから、それが頭についたまま離れない。

事件のおおそがわかったにしても、まだ推論にすぎないところが多すぎる。それを明らかにするためには、仕掛けが必要だった。絶対に僕が勝つための仕掛けが。

そのためにも、そしてなによりもあいつを自由にするために、僕は有坂に真っ先に電話をかけた。

「有坂さん……」

電話で告げる声が、ふるえるのがわかる。

「わかったよ、全部、わかった……」

「どういうこと？」

僕は、塾で見つかった遺書について有坂に話した。僕の推論についてもはなした。

そして、言った。

「今日の午後八時、理科準備室に来てほしい。この事件がどんな終わり方をしたのか、有坂さんには見る権利があると思う。できれば、手伝ってほしい」

「どうすればいいの？」

「あいつらとのやりとりをテープに撮っておきたい。カセットはこつちで用意するから、あいつらに見つからないように持っていてくれないかな？」

「うん、わかった」

「それから、その前に迎えに行くよ。いろいろ打ち合わせもあるから、七時に有坂さんの家に」

「六時にしてくれない？なるべく時間があつた方がいいでしょ？」

「わかった」

「これで……終わるの？」

おずおずと、有坂が尋ねる。

「うん。これで、全部終わる。もう大丈夫だと思う。やり方さえ間違わなければね」

「……わかった」

短くそれだけ言って、電話は切れた。

そのあとも、僕は何本か電話をかけた。「今日の八時に理科準備室に来てくれ」と。

関係者の呼び出しが終わると、僕は繁華街へと出かけ、また何人かと話した。

絶対に負けない準備をするために。
準備が終わると、僕は有坂の家へと向かった。

六時。僕は有坂の家の前に立っていた。ベルを押すと、中から有坂が顔を出した。緊張した面もちだ。

「おじゃまします」

あいさつをして、部屋の中にあがる。

僕は自分の推理をあらかじめ有坂に話すことにした。

僕の推理を聞いたあと、有坂はしばらく言葉を発しなかった。

「呼び出した後に、殺されるってことはないの？」

「まずないと思う。何回も続けて殺すのはリスクが大きすぎる。

僕ならやらないな。特に今回は、自殺に必死になって見せかけてるしね。この状態で殺しにはあまり持ち込みたくないはずだ。まず僕の持っている情報を知ろうとするはず。…そこでテープが必要になるんだ。あれで警察に情報を流す」

「それで、カセットはどこにあるの？」

ポケットから小型のテープレコーダーを取り出す。

「これを持っててくれないかな？もちろん、犯人にばれないようにね。これで録音して、動かぬ証拠をつかんでやる」

「何かあったときはどうすればいいの？」

「合図をするから、そしたらテープを止めて。もちろん、これはまずいと思ったら自分でテープを止めてもらっていい」

「わかった」

有坂が頷く。

「それにしても」

ふいに、有坂が言った。

「どうして黒川君は、私も連れていくの？黒川君一人でやった方が、ずっとよくない？」

多少硬い表情。

「有坂が、悪い夢にうなされないように」

「どういうこと？」

「うーん、うまくいえないんだけど…」

考えながら、言葉を探す。

「この事件はさ、僕だけが被害者なんじゃない。有坂さんもひどい目に遭ってるから。」

だから、有坂さんにも手伝ってもらうんだ。この事件に幕を引くのは、僕もそうだけど、有坂さんが自分自身でやるべきだと思うから。自分自身で決着をつけないと、たぶん一生負けを引きずらなくちゃいけないと思うから」

あの記者が言ってたこと。

「特別」という優越感を持ったまま、ただ泣いて、待っているだけ。

そんなのは、もういやだったから。

「ここで決着をつけたい。僕も有坂も、一生逃げ続けることのないように」

僕の答えに、有坂は顔をゆがめた。泣きそうな顔になる。

急に、有坂が僕に抱きついた。

「どうしたの？」

聞いても、首を振るばかりだ。

「ごめん…ちょっとだけ、このままでいさせて…」

弱々しい声で、有坂は言う。

何か事情はあるのだろうか、聞くことはできなかった。代わりに、ただ抱きしめた。

有坂が落ち着くまで、ずっとそうしていた。

第十七話 犯人

八時。僕は有坂と一緒に学校へと向かっていた。

すでに校舎に明かりはない。それでも用心してあたりを見渡し、一回の教室の窓から部屋へと入る。理科準備室の前に立ち、ひとつしかない入り口のドアを開けた。

窓もない部屋だ。暗闇の中に、ぼんやりと人の姿が見える。

高原、唐沢、佐久間、宮野、岸、里中。

もともと狭い部屋だ。僕たちが入ると、ちょうどいっぱいになった。

「どういつつもりだ、こんなところに呼び出して」

高原が、押し殺した声で言った。

「わからないか？」

「わかるわけないだろう。おまえが、木田と秋川の自殺について話したいことがあるって言うから来たんだ。こんなところに呼び出さなくても、おまえが警察に自首すれば済むことじゃないか」

あたりで、いくつかうなずく気配があった。

「来たんだな」

「なに？」

「たつたあれだけの呼び出しで、よく出てくる気になったよな。僕だったら、無視するけど」

沈黙。ややあって、さっきよりも大きな怒声が聞こえてきた。

「おまえが呼び出したんじゃないか！」

「まあね。じゃあ、さっさと始めようか」

相手の反応を無視して、続ける。

「今度の事件の謎は、どうして木田が死んだのかってことにつな

がってくる。その動機さえわかれば、木田の自殺が証明できた訳なんだけど……」

ここでいったん言葉を切り、続ける。

「死ぬ動機の代わりに、こんなものが見つかった」

そういつて、あの木田の「遺書」をとりだす。

「これが木田の塾で見つけた時点で、木田の自殺はなくなった。木田が死んだのは、自殺なんかじゃない。木田は、殺されたんだ」

じゃなきゃ、どうして遺書の名前が僕の名前になってたんだ。自殺なら、普通名前には自分の名前を書くだろう。そもそも、塾の授業中に書くはずもない。ましてや、書き損じを机の中に入ればなしにするなんて、そんなことは絶対にない。

じゃあ、誰に？誰に殺された？

その名前はもうわかっていた。とうの昔に、気づいていなければならなかった名前だった。

「新聞やニュースでいった遺書とこれは、全く変わらないものだ。そうすると……僕に罪をかぶせそうな人で、木田を殺して得をするものは」

僕はぐるりとあたりを見渡した。

「ここにいる人たちしかないよ」

沈黙を続ける回りに違和感を感じながら、僕は続ける。

「おかしいとは思ってたんだ。普通、友達が死んで、しかも彼にいじめられてた人間を疑ってるなんて時は、もう少しおびえたり逆上したりするはずだとおもうんだけど。それが全然ない。

だから、少なくとも僕が事件とは関わりがないことを、おまえらは知ってたってことになる。それも、確信を持って。そんなことができるのは誰か？一番可能性が高いのは、犯人だろうね。そう考えれば、すべてにつじつまが合う」

「木田が死んだ日。おまえらが木田と下校したとき、途中で花屋によって、花を買った。なんのためか、ずっと不思議に思ってたんだ。…これをみつけるまでは」

そういつて、遺書をふる。

「僕の葬式を出すためだったんだな」

昔、葬式ごつこというものがあつたそうだ。もう十何年も前の話だ。一人の犠牲者の机に花が飾られ、教師まで混じつて弔辞が捧げられた。あれと同じだとしたら？

葬式ごつこというかたちをとるためにこそ、ああいう書き方をしたんだ。あれだったら、死ぬのが誰でも使い回すことができるから本当は、あれは僕の遺書だったはずだ。その遺書を作らせるために、そしてそれをあいつに書かせるために、葬式ごつことを仕組んだんだ。たぶん高原たちは、木田に向かってこういったのだろう。「黒川の葬式を出してやろう」と。そして頼んだにちがいない。「あいつの遺書を書いてくれ」と。木田は字がうまかつたし、リーダーだったから、喜んで引き受けたのだろう。

そして遺書を偽造させ、自殺の状況を作り上げた。

「ごちゃごちゃと書き込みがしてあることから、これは練習用紙だ。おそらく、僕にダメージを与えるために、できるだけ凝った文を考えようとしたのだろう。途中であきらめたみたいだけど。」

「そういう風に、おまえらは木田に説明したはずだ。その後、あいつは家へ帰り、塾へと向かう。塾からあいつは家へと帰らなかつた。まっすぐ学校へと向かつたんだ。そして屋上で、木田は突き落とされ、死んだ」

「…秋川の自殺についてはどうなんだ？」

「それは木田よりもずいぶん簡単だった。あの二、三日前から秋川の様子はおかしかつたしね。それを知つてたおまえらは、有坂

と僕を呼びだしていじめることを提案したんだ。秋川はそれに飛びついた。

そして秋川を信用させるため、それから僕らに『自殺』の設定を信じやすくするために、彼女に僕らを呼び出させた。まさか断られるとは思ってなかったろうけど、どうせ僕らが出てきてもどこかで足止めを食ったはずだよ。あとは頃合いを見計らって突き落とせばいいだけだ」

淡々と、僕は続ける。

「秋川の妊娠をおまえらが知ってたかどうかは知らない。たぶん知らなかったんじゃないかとは思うけど、別に知らなくても問題はない。秋川の自殺の理由については、木田の後追いで簡単に説明が付く。遺書なんか無くても、秋川と一番親しかったおまえらが『秋川の様子がおかしかった』と噂を流し、警察に証言するだけで、かんにんに自殺としてけりが付く」

「まあ、よくそんなことを考えたな。想像力だけはほめてやるけれど。それで、おれたちが木田を殺したとして、どんな理由で殺したんだ？一応聞くだけは聞いてやろう」

唐沢の声。

「理由は…」

前に、ふいに心のなかにひらめいた言葉。

「恐怖」

「恐怖？」

「ああ。それぐらいしか、理由が思い浮かばない。最近僕があまりいじめられなくなってきたことと関係があるんだと思う。階段下の部屋で佐久間がなにをされてたかということだね。

いじめる相手が、移ってきたんだろう？ずっと僕だったのが、佐久間になった。次は唐沢かもしれないし、高原かもしれない。…でも、木田だけはない。あいつは、このグループの、本当に中心だか

らな。同じことは秋川達にもいえる。ただ、秋川達はいじめの相手が移ったなんてことはないみたいだ。…木田達の現状を見て、怖くなったんだろう。そして同じくリーダーを殺すことで、グループから誰も抜け出せなくなるようにしたんだ…」

高原が、あきれたように首を振った。

「もしおまえがいったのが正しいとして、あの事件の前日におまえはやられてるんだぞ。」

いじめる相手がまたおまえになったってことじゃないか」

「いつまで続く？」僕は、短くかえした。

「一度対象が移った以上、これからはいつでもいじめる相手が変わるって可能性があるわけだ。あの日僕にいじめる相手が変わったことは、おまえらのアリバイを補強する役目しか果たしてないと思う。さしあたり僕にターゲットが移っただけじゃ、おまえらが木田を殺すのを思いとどまる理由にはならなかったってこと」

「おまえ、ばかか？」

唐沢があきれた声で言った。

「木田が殺された時間、俺達はみんな他の場所にいたんだぞ？」

「知ってるよ。秋川が殺されたときも、里中達は別の場所にいたんだよな？」

僕の声に、彼女たちが頷く。

「じゃ、木田が殺されたとき、里中達はどこにいた？」

また沈黙が降りた。

「聞いたよ。電話かけまくってさ。みんなあの日は夜遅くまで帰ってこなかったんだって？高原達も。秋川が死んだ日は、夜遅くまで外で友達と遊んでたって」

「それがどうしたっていうんだ？」

高原の声は落ち着いたままだ。ここまできても、まだ動揺してい

ないのは、立派なのかどうか。

「そのときおまえらはどこにいたんだ？」

答えは返ってこない。

「じゃあ、言うよ。想像だけど、たぶんそんなに間違っではないはずだ。木田を呼び出したのは、宮野たちだね？なんて言って呼び出したか知らないけど。木田を殺したのも、もちろん宮野たちだ。そしてそのとき高原達は、全員外に出た。夜の十時に、中学生が、全員目立つようなところにいた。もちろん、アリバイを作るためにね。」

そして秋川の時は、それと逆。高原達が秋川を呼び出し、殺す。そして宮野たちは必死にアリバイを作ってたんだ」

佐久間が、あきれたように首を振った。

「俺達よりおまえの方がよほど強い動機があるはずだぞ？警察が見落としただけで、実はおまえのものがあのそばに転がってるかもしれないし」

「転がってはいえるだろうね。ない方がおかしいよ。僕らがあそこに入りしてたことぐらいは警察にもわかるだろう」

「だったら…」

「だから、僕らから屋上の鍵を取り上げたんだろ？」

「どういうことだ？」

「だって、わざわざあんなことまでして遺書を作ったのは、木田を自殺に見せかけるためだろ？僕らがあそこに自由に出入りできる状況だったなら、他殺の線が出てくる。そうすると警察は本腰を入れて調べるだろうから、もしかしておまえらにまで捜査の手が伸びるかもしれない。それを避けるためには、なるべく他殺を示唆するものを減らさなければならぬ。ひょっとしたら、僕たちのアリバイも必要なくらいなんじゃないか？」

だから、僕らから屋上の鍵を取り上げた。これで僕らが屋上に入

することはできなくなる。木田を殺すこともできなくなる。

木田を殺すことができるのはおまえらだけになるけど、おまえらにはちゃんとしたアリバイがある。こうなれば、木田を殺すことができるものは存在しない。木田は自殺ということになる。

その上で、僕たちが木田殺しの犯人だという噂を流す。警察に悟られない程度に、ひそかにね。そしてその噂を使って、僕たちをいじめ続ける。そのことで、木田を殺した事実とともに、グループをまとめていこうとしたんだ。スケープゴートをして半永久的なスケープゴートを作ることだ」

誰も、なにもしゃべらない。夜の学校は静寂そのもので、ときたま走る車の音だけがあたりに人がいることを示していた。

「証拠はどこにある？」

薄い笑みを浮かべたまま、佐久間がいった。

「そう、証拠がなかった。状況証拠だけだ。木田が花を買ったのも、里中達がその日の九時からいなくなってたのも、みんな状況証拠。

…ただ、秋川が死んだ日に、宮野達が有坂に言ったこと。あれだけ、ちょっとまずかった」

宮野たちが緊張するのがわかった。

「どうして秋川が死んだときの電話の内容を、おまえらが知ってるんだ？僕らのところに警察が来たのはあの葬式の後だったんだぞ。それに、警察からあの電話についての質問もなかった。おまえらが知ってるんだったら、絶対警察に言ったはずだ。その方がおまえらに有利になるからな。それを言わなかった。

わからないのは、おまえらがなんでそれを有坂にいったのかということ。あれだけ用意周到なおまえらが、なんでそこでだけ答えを漏らしたのか…」

ぴぴっ、ぴぴっ。

時計から流れる電子音が、耳障りに九時を告げた。

ふいに、高原が笑い声をあげた。

「それで勝ったつもりか？今ここでおまえを黙らせれば、証拠をすべて消すことができるんだぜ？」

「僕がそんなことも考えずにおまえらを呼び出したとも思ってたのか？心配してもらわなくても大丈夫だよ。ちゃんと手は打っているさ。なあ、有坂……」

僕の声はそこできれた。

有坂の手には、真ん中あたりでテープを切られたカセットが乗っていた。

第十八話 絶望

「…どうして、」

そんな、と聞こうとして、あることに気づく。

これまでの事件で、一番動機のあるもの。

秋川と木田を殺す、もっとも強い動機があるのは…

僕と、有坂。

でも、彼らの計画では、僕と有坂は、事件が終わったあと攻撃するためのスケープゴートだったはず。だから、有坂を殺しそのものに参加させることはできなかったはずだ。

じゃあ、どうして？どうして有坂が、向こう側に？

制服の裾を血管が浮き出るほど握りしめながら、僕は自分の失敗を悔いていた。

「どうした、拳なんか握って？」

佐久間のあざけるような声がした。

「俺達を捕まえるんじゃないかったのか？」

舌なめずりをするような、唐沢の声。僕は耳をふさぎなくなった。僕が負けたことを示す、その声から。

「どうして、有坂が、そっちに…」

そういつてはいるものの、僕はもうすでに真相が分かっていた。はめられたんだ、こいつらに。

「ごめんなさい」

有坂の声。今にも泣きそうな…いや、泣きそうに聞こえる声。

その声が、僕への謝罪を装って聞こえてくる。

「この計画を立てたのは、私だったの！」

ずっと、気にかかっていたこと。

木田殺しと秋川殺し、交換の話を誰が持ち出したのか。誰が中心になってこの計画を立てたのか。

有坂のアリバイは、聞けなかった。聞けば、あの日にたどり着くから。

「この計画は、前から立ててたの」

押さえたような声で、有坂が話し出す。

「あの日。屋上の鍵を取られた日。あのとき、気がついたの。」

…いまなら、あの計画が実行に移せる。

鍵をとられたのは偶然。でも、それが最後の決め手になることに気が付いた。

だから、黒川君のアリバイを作ろうと思ったの。黒川君が疑われることのないように」

…そうか。

それで、彼女はあのチケットを持っていたんだ。それで僕のアリバイを作るつもりだったんだ。

遊園地のそばの店にでも僕を呼びだしてから、都合が悪くなったと有坂が連絡をすればいい。それだけで、僕のアリバイはできる。

「でも、あのとき、黒川君にさよならを言われて。

どうして、あんなことになったのか、わからなかった。黒川君が、私を見捨てたと思ったの。」

だから、黒川君を置いて、計画を進めることにしたの」

有坂は、僕が事件に巻き込まれないように、できる限りのことをしようとしていた。

しかし僕は、有坂のさしのべた手を振り払ってしまった。あのとき、僕が犯人に仕立て上げられる状況ができた。

何のことはない、最初から僕は僕の手で自分を罠に引きずり込んでいたのだ。

うなだれる僕の前で、有坂の告白は続く。

「計画はできていたから。あの後には簡単だった。里中さん達に計画を話して。黒川君の葬式を、木田君に持ちかけて。学校に忍び込んで早いうちに準備しておいたほうがいいって言って、遺書を書かせて花を買わせて。そこから先は知らないけれど」

有坂が、いいにくそうにして、言葉を切った。

「でも、黒川君がどうしてもあんなことをしたのか、どうしても気になって。それで、あの公園に行ったの」

有坂は、熱に浮かされたかのように話し続ける。

「黒川君がどんなことを考えてたかわかったときには、もうどうしようもなくなってた。」

木田君はもう殺されたあとで、私はただ計画を進めるしかなかった。私は捕まりたくなかったから」

「もういいよ、有坂さん……」

僕の制止の声も、有坂には届かない。

「私は、自分が助かるために、黒川君を……」

最後の方は言葉にならなかった。

ひどく重苦しい気分だった。

どうして気づかなかったんだろう。気づこうと思えば、気づけたはずなのに。

「……それで、僕をスケープゴートにしようとしたわけ？」

「違う！」

激しく首を振る有坂。

「そんなことは全然考えてなかった。私が考えたのは、木田君と秋川さんの交換殺人と、それを自殺に見せかけることだけ。木田君の遺書についても、私。その方が木田君の自殺に信憑性が出るから。でも、それだけ。」

甘かった。私と黒川君をスケープゴートにするなんて、考えても

なかった。木田君と秋川さんを何とかすれば、いじめは収まると思
ってた。とくに私は、この計画に加わってたから。まさか、わたし
を犯行からはずして、そのことでいじめるとは思ってもなかった。

最初におかしいと思ったのは、木田君が殺されたとき。私はずつ
と家にいた。私には、何の連絡もなかった。

本当におかしいと思ったのは、秋川さんが殺されたとき。わざわざ
電話で私を呼び出そうとしたとき。わたしには、アリバイがなけ
ればならないはずなのに。

次の日の学校で、それがどういうことなのかかった。わたしが、
スケープゴートにされたことがわかった。黒川君と一緒に。

だって、里中さん達が計画に沿って二人を殺した証拠なんてない
から。犯行に参加させないということは、共犯じゃないってこと。
グループの中には、永遠に入れてもらえないってこと。

他のみんなが口裏を合わせれば、私は簡単にスケープゴートにな
る。だから、木田君を殺したときに、私は呼ばれなかった。当然、
アリバイもない。…里中さん達は、好きなだけ私をいじめることが
できる」

…そうか。有坂は計画を立てていたわけだから、警察に里中達を
告発することもできない。

それでいて、本当に人を殺しているわけではない、つまり里中達と
行動をともししていないから、スケープゴートにされる。

あの日有坂があんなに取り乱したのは、自分がこの計画からはず
されたことを知ったから。自分が結局捨て駒にすぎず、何かの時に
は責任を押しつけられることがわかったから。

だからあの日から、有坂の様子はだんだんとおかしくなっていっ
た。それでも木田殺しを計画したという弱みを握られていた彼女は、
宮野たちのシナリオのまま進んで行くしかなかったのだ。

「おまえがなにをやるかってことは、もう昨日にはわかってたんだ。こいつが教えてくれたからな。おまえは、不思議に思わなかったか？ たったあれだけの呼び出しで、俺達みんながここにのこのことまでできたこと。おまえを笑いものにするために、わざわざみんなここまででできたんだ。予想通りに踊ってくれて、おまけにこの事件の罪までかぶってくださるんだ。よかったな、おまえみたいなやつでも、使い道があつて」

得意げに高原がいう。

彼らがなにをやるかはわかっていた。たぶん僕は木田と同じ運命をたどることになるだろう。

けれど僕の心には、有坂のことしかなかった。

考えてみれば、最近の有坂の様子はおかしかった。けれど僕はそれに気づかず、自分の考えを追っかけるのに夢中で…

また、有坂を守れなかった。

手のひらから血のそようなほど硬く拳を握りしめる。

「さあ、おしゃべりはここまでにして」

里中の声で、出口にいる僕をあいづらが取り囲んだ。

「あまり自殺ばかり続くと怪しまれるぞ」

有坂に言ったことを、もう一度繰り返す。

「そのときはうわさを大々的に流すわよ。あんたがあの人を殺したってうわさをね。動機は十分だし、アリバイもないしね」

「…そうか、だから僕にアリバイを作らなかったのか。何かあったときに、罪を着せられるように」

「そういうこと。正直、ここまであんたができるとは思わなかったから、私は作らなくてもいいっていったんだけど」

「…ほめられたと思っておくよ」

「ほめてるわよ。ここまで無駄な努力ができるなんて」

そういつて、里中が笑う。

「どうせなら、これを書いてもらおうか」

そう言つて高原がふところから何かを取り出した。

白い紙。木田の遺書と同じ紙だ。

「無理やり書かせるのか」

「言葉が悪いぞ。死の直前に悔い改めたに決まつてるだろうが」

唐沢の言葉に、皆が笑つた。僕と有坂以外の皆が。

第十九話 逆転

すこしずつ、高原達が近づいてくる。
ゆっくり、ゆっくりと。

まるで、僕をいたぶるかのように。

いや、本当にそのつもりなんだろう。

抵抗できない僕を、こいつら全員でいたぶる。

いつだってそうだった。

こいつらは、自分たちが絶対負けない状況でないと、ひとを殴ることもできない。

いつも安全なところから、僕が苦しむのを見て喜んでいる。

こんども、それと同じだと思っっているんだろう。

ちらりと時計を見る。九時半。

「…おまえら、不思議に思わなかったか？」

ゆっくりと、声を出す。

「なにがだ？」

佐久間が聞き返す。笑いを含んだ声。勝ち誇った声だ。

「僕が、どうして二人でのこのことこんなところに来たのか。どうして、こんなひとけのないところにわざわざおまえら呼び出したのか。おまえらがその気になったら、すぐに僕らは殺されてしまうのに」

「さあな。そんなこと聞いたってしょうがない。どうせすぐにおまえは死ぬんだしな」

「…そうかな？」

精一杯自信ありげな声を出し、あたりをうかがう。

左の壁際。こういった教室にはたいていついているものが、そこにもあった。

できるだけさりげなく、手を伸ばす。

高原が気づき、それを止めようと動く。だけど、僕の方が少しだけ早かった。

僕の指が小さなボタンを押した。火災報知器のボタンを。

けたたましいサイレンの音がしんとした校舎に響き渡った。

「誰もあたりに来ないのなら、来るように呼べばいい。何も、警察を呼ぶ必要はないんだ。誰か大勢が来て、僕らの安全が保障されればそれでいい。」

「だから、おまえらをここに呼び出したんだ。この事件を証明したいのなら、普通は木田の殺された屋上に呼び出すと思うよ。けれど、屋上にこんなものはないしね」

そういつて、報知器をたたく。

「これで、もうすぐ消防士が来るだろう。すくなくとも、僕を殺すことはできなくなっただな」

たちまち、あたりは罵声でいっぱいになった。

その中で冷静さを失っていなかった高原が、鼻で笑った。

「証拠もないくせに、どうするつもりだ？」

「証拠ならあるさ」軽くいつた。

「どういうことだ？」

「いわれなくても説明するよ。そんなに難しいことじゃないけどね」

といつて、制服の裾のポケットを探る。

そこに携帯電話があつた。小さな画鋐が突き刺さり、画面に大きなひびが入っている。

もう、どんな風に使うこともできないだろう。

「高原達への脅し以外には。」

「壊れてるじゃないか、その携帯？」

「壊れてるんじゃない、壊したんだよ。有坂さんに切ったテープ

を見せられたときにね」

「だから、どうしたんだ？」

「家にもう一つ携帯が転がってて、レコーダーにつないである、
っていったら？」

さつきよりも、もつとすさまじい罵声。

「悪いね、証拠がたつたひとつじゃ不安で」

「おまえ、じゃあ、最初から…」

「そう簡単に手の内なんか見せないよ。もちろん、録音もしてある。ああ、それから、聞くだけのことはもう聞こえてるはずだから、たぶん、有坂さんがテープを切ったすぐあとまでだ」

「だからおまえ、あそこで拳なんか握って…」
唐沢がうめいた。

「有坂さんに何か起こったのは、すぐにわかったから。できるなら、有坂さんを巻き込みたくはなかったし」

声もなくうめく高原達。

「状況が悪くなったらすぐに逃げる。どんな些細な兆候でも、決
して見逃さない。…おまえらが教えてくれたようなもんだ。おまえ
らの足音だけ、耳を澄まして聞く生活が何年も続けばな。実際、危
なかったよ。いつ気づくかと思つてひやひやしてたんだ」

勝ち誇った響きが僕の声に混ざるのがわかった。

「よかつたよ、おまえらが単純で。ひとつ仕掛けをしただけで満
足するなんてね」

うなだれる高原たち。

「なんで、わざわざ呼び出したんだ？」

「わからないところを、おまえらの口からしゃべってもらう必要
があつたからな。だから、おまえらが優位に立てるような場所に、
わざと呼び出した。油断して、何かしゃべってくれないかと思つて
ね。おまえら、面白いくらいに踊ってくれたよ。正直、感謝したい

くらいだ。

それから、もう一つ。個人的な理由だけ……」
につこりと笑っている。

「一度、勝てる喧嘩をしてみたかったんだ。絶対に勝てる喧嘩。おまえらがいつもやってるみたいだね」

それから僕は、ゆっくりと有坂の方に向き直った。
勝ち誇った気分は一瞬だった。

こんなことをしても、有坂がこの計画を立てたことには変わりない。

僕は、結局有坂を助けることはできなかったんだ。

「有坂、前にいったよね。僕は結局、人を信じることができないんだって。

そうかもしれない。有坂を信じて、この計画を全部うち明けた方がよかったかもしれない。

でも……」

言葉が続かない。僕のいつているのは、結局いいわけにすぎないことが、わかっていくから。

「本当に信用できなかったのは自分だよ。どうしても、僕がこれをやつてのけられるなんて思えなかったから。だから、僕がどんな失敗をしてもいいように予備の手段を作っておいたんだ」

うつむいている有坂に、淡々と語る。

「できれば、使いたくなかったよ、こんなもの。有坂が持っていたテープだけで、どうにかできると思ってたし。

けれど……

絶対に勝ちたかった。有坂が、僕がどうなってしまうても、絶対に勝ち抜ける証拠がほしかった。

……まさか、こんなことになるなんて、思ってもいなかったから」

「ひよつとして、これが一番の失敗だったかもしれないけど。ひよつとしたら、このまま僕が殺されていた方が、有坂にとってはよかったかもしれないけど。」

でも、殺されてやることはできない。まして、その後で有坂がどうなるかわからないのなら。

…うそだな。

結局、僕は死にたくない。有坂の安全は、その次だ。有坂のことはできる限り守ってやりたいけど、僕の命と引き替えにはできない。有坂は、無表情に僕の話聞いている。

「ごめん、有坂…」

謝ること以外、僕にはなにもできない。すくなくとも、いまは。それ以外になにを言っても、発した言葉は空回りして床に落ちるだけのような気がしたから。

第二十話 Deus ex machina

「ちくしょう…」

高原のうめき声で、僕は現実へと引き戻された。

高原の手には、冴え冴えと光るナイフがあった。

「こうなったら、おまえを道連れにして…」

高原の目には、尋常ではない光があった。見ると、他の奴らも、男も女もみんな得物を取りだしている。といっても、僕の目から見てもその握り方はぎこちない。人を脅すために見せつける、ただそれだけのためにナイフを使ってきた証拠だ。もしくは、自分の安全と自尊心を守るための、ただのこけおどしとして。

とはいっても、それだけに追いつめられた今は何をするかわからない。ナイフの怖さを知らないから。

「こんなことしても、なんにもならないぞ。僕を殺したところで、ここにはすぐにひとがくる。たった十分か二十分で、僕を殺した証拠を消すことなんてできるわけがない。どっちにしても、おまえらは捕まるぞ」

いいながら、さりげなく入り口の方へ体を寄せていく。

「うるせえ！」

優等生にしては陳腐な言葉を吐いて、高原がこちらに向かってきた。

「有坂！」

小さく叫んで、僕は有坂の手をつかみ、力任せに引っ張った。高原のナイフをかわし、そのまま教室の外へ回りこむ。左手で有坂を抱き留めながら、右手で入り口のドアを閉め、そこで踏みとどまってドアへと倒れ込む。誰かの指を挟んだらしい。何かが碎ける感触。それでも僕はドアを押し続け、やがて完全にドアは閉まった。

中から強い力で押されている。高原達が、力任せにこのドアを開けようとしているのだ。ありったけの力を、ドアへと掛ける。それでも、何度も体当たりを食らうたび、ドアが外へとたわむ。このままでは、ドアが破られるのは時間の問題だ。

腕の中の有坂を、ちらりと見る。

手伝ってもらいたかったけれど、それは都合がよすぎる。

有坂を裏切ったのは、僕なんだ。

手伝ってなんていえない。

それに有坂にしても、ここで僕が死んだ方が都合がいいだろう。

こうなった以上、有坂が助かるには、高原達と同じ方法…僕を殺して、証拠を消してしまうことしかないから。

だから僕は、有坂には頼まなかった。自分一人で、ドアを押し続ける。

「黒川君…」

有坂が、腕の中で身じろぎした。

「どうして、わたしを助けてくれたの？わたし、黒川君を、殺そうと…」

「だからって、あんなところにおいとけないよ！」

思ったより、ずっと強い声が出た。有坂が、びくっと身をすくませる。

「あんなところにおいといたら、有坂さんが殺されるかもしれないよ。そんなのはいやだ。」

…僕は有坂を裏切ったけど、それでも、有坂が殺されるのなんか嫌だ。

どこかに逃げて。せめて、消防車が来るまでは。そうすれば、たぶん、生きてはいられるから」

それを聞いて、有坂が一瞬、泣きそうに顔をゆがめる。

そして、そのまま僕の腕から抜け出し、どこかに去っていった。
…よかった。これで、有坂が死ぬことはなくなった。
あとは、消防車が来るまで持ちこたえるだけだ。
…それが一番難しいことは、よくわかっていたけれど。

ドアに掛かる力は、ますます強くなっていった。

これまで持ちこたえていたことの方が不思議なんだ。

消防車は、まだ来ない。

また、強い衝撃が来た。

たぶん、次はもたない。

もう、体に力が入らない。

手足のあちこちが痛い。膝ががくがくと震えている。

それでもドアに力を掛け、最後の衝撃に備えようとしていたとき…

「黒川君！」

有坂が、そこにいた。

大きなロッカーを、一生懸命に引きずってきていた。

そして僕の脇に、ドアの入り口にしっかりと立てかける。

これだけで、ドアはほとんど動かなくなった。

そのあとも、有坂は机や椅子を次々と持ってきて、無言のままドアに立てかける。

やがて外開きのドアは、完全に動かなくなった。

中からはドアを力任せにたく音が聞こえる。破られることはないだろうけど、それでも怖くて、僕らはずっと体をドアに押しつけていた。

「…有坂さん、どうして…」

僕の質問に、有坂は少し悲しげな顔をしただけだった。

中からは、悔しまぎれの高原の声が聞こえてくる。

「有坂はおまえを裏切ったんだぞ。そんなやつが信用できるのか

？」

「おまえよりはな」短く、僕は答える。

「有坂」里中の声。

「これを計画したのはあんたじゃないの。もしそっちに残ったら、警察に捕まって少年院に送られるわよ。それでもいいの？」

有坂の顔が青ざめた。が、きつぱりと首を振る。

「もう…嫌だよ。檻の中で、みんなにばかにされて暮らすのは。

このままそっちに戻ったところで、結局いじめられるのは変わらないもの。だったら、あんた達の作った檻の中だけは、絶対入らないそれなら、本物の牢屋の方がまだまし」

いたたまれなくなった。そこまで彼女を追いつめたのは僕なのに、今はなんにもしてやることができない。

「もつと早くから、こうしていればよかった。どちらにしても捕まるのなら、黒川君と里中さん達なんて、くらべるのもおかしいよ。黒川君は、できる限りのことはしてくれた。それで、じゅうぶん」

そう言う有坂の体が震えているのに、僕は気づいた。

けれど、抱きしめられない。支えてはあげられない。

有坂をこんな状況に追い込んだのは、有坂が捕まりそうになっっているのは、僕のせいなんだ。

とても、そんなことはできない。

だから、震えている有坂を、ただじつと見ていることしか、僕にはできなかった。

消防車のサイレンの音が、やっと遠くから近づいてきた。

「頼むから、おとなしくしてくれないかな。見苦しいから」

「おまえ…」

「もうすぐ消防車が来るから、それまでの我慢だよ」

もちろん、あいつらはわめき立てる。それを無視し、僕はいった。「でも、わからないことがひとつあるんだ」

質問を、ドアの向こうに投げかける。

「いつたい、誰が首謀者だったんだ？ いや…誰を首謀者にするんだ？」

ドアの向こうの騒ぎが、一瞬でやんだ。ほんとうに、ぴたっと。

「…どういうことだ？」

「有坂は計画を立てただけだろ。有坂をこの計画からはずして、木田と秋川を殺し、僕らをスケープゴートにしようとしたとき。その計画を立てて実行に移したリーダーが、必ずいるはずなんだ。それは、誰だったんだ？ 一番責任のある奴は、誰だったんだ？」

その一言で、ドアの向こうの雰囲気が変わったのがわかった。ぼそぼそと声が漏れてくる。お互いをのしり合う声、いらだった声。

どうやらあいつらの攻撃対象は、仲間内の誰かに移ったようだ。ドアにかかる圧力は、もう感じられなかった。その代わり、口論だけが激しくなっていく。

「有坂」小声で呼んだ。

「なに？」おびえたように身をすくませる有坂。

「そろそろ消防車が来るよ。玄関まで降りていこう」

「ドアを押さえなくてもいいの？」

「そこまで手が回らないよ。それより、このままだと…」

そのとき、中から悲鳴が聞こえた。今まで、聞いたこともないような、それでいて二度と忘れられなくなるような、そんな声だった。

「急ごう！巻き込まれたら大変だ！」

そういつて、呆然としている有坂の手を引き、階段を駆け下りる。

玄関には、いらだった様子の消防士達がいた。

「ベルを押したのは、君たちか？ こういういたずらは、困るんだが…」

「それはあとです！とにかく、すぐに来て！」

僕の声に切迫したものを感じたのだろう、何人かの消防士が僕と一緒にいつてきた。

理科準備室の前のバリゲードを見て、彼らは絶句した。

「これは、いったい……」

だがその声も、中からの声で中断された。

悲鳴がまた上がったのだ。それから、何かが倒れるような音。

彼らは一瞬顔を見合わせたあと、すぐさま掃除道具入れをどかし、ドアを開けた。

準備室の中は血の海だった。

佐久間が首から血を流し、里中の制服の胸は赤く染まっていた。

そのほかのものも、体の至る所から血を流し、ぴくりとも動かずに横たわっている。

たったひとり、奥の方でふるえている男がいた。高原だった。目にはすでに正気の光はなく、血塗れのナイフを見つめて何事かをぶつぶつとつぶやいていた。

後ろの方で、だれかが吐く音がした。

第二十話 Deus ex machina（後書き）

みなさん、ここまで「冬の話」読んでいただきまして、ありがとうございます。

感謝感激雨霞です。

さて、一応の決着は付きましたが、この話はもう少し続きます。

「なんじゃあこりゃあ！」と思った方は、タイトルの意味を調べてみるといいかもしれません。

意味するところとしては、「不自然な解決」です。

第二十一話 それぞれの祈り

あれから、一週間が経った。

結局高原達は、高原以外の五人が全員死亡、高原は精神に異常を来していてそのまま病院へと送られた。

警察がやってきて根ほり葉ほり聞いていったものの、あのレコーダーがものをいって、僕らにはおとがめなしで終わりそうだった。

有坂が計画を立てたことは、誰にも知られずにすんだ。高原達が全員死ぬか精神をあちらにとばしたおかげで、すべての罪を彼らに押しつけることに成功したのだ。

だから、その結果、僕と有坂は、二人で協力して高原達の犯罪を解決したということになっていた。

事件はマスコミに大きく報道され、僕の家にも報道陣が押し寄せた。

いっさいコメントをしなかったこともあって、純情な熱血少年から、蛇のように冷酷な姿まで、さまざまな「本当の僕」がテレビの中を飛び回っていた。

学校では、校長や担任が謝罪の記者会見を開き、「我が校でこんな事件が起こるなんて」と口をそろえた。半分ぐらいは彼らの本心だろうと、僕は思った。

宮野たちの家は葬式を行ったが、参列者は数えるほどしかいなかった。その数少ない参列者も、マスコミにもみくしゃにされて四苦八苦していた。

中山は僕との会話を大手週刊誌に売り込み、この事件に関してテレビなどにかり出されることも多くなった。僕のところにも取材交渉に来たが、丁重にお断りした。

あの日から、有坂に何度も電話をかけたけれど、彼女の母親が出るばかりで、彼女にはつながらなかった。

有坂の親の話によると、有坂は僕からの電話は全部切るようにいったのだという。それは、わからなくはなかった。理由と結果はどうあれ、結局僕は有坂を裏切ったのだ。有坂が恨みに思うのも、無理はない。

けれど、僕は有坂にどうしても言っておかなければならないことがたくさんあった。これをすまさなければ、僕たちにとって本当にこの事件が終わったとはとてもいえない。

だから、僕は今ここにいます。有坂の家の、すぐ前に。

チャイムを押すが、返事がない。

有坂の部屋は、窓際のはずだ。

手近にあった石を拾い、部屋の窓に投げつける。

小さな音がして、石が窓に跳ね返った。

有坂の部屋からは、何の反応もない。

それでも、僕は投げ続けた。

何十度目だっただろうか？

窓が少しだけ開いて、すぐにしまった。

どうやら、有坂はいるらしい。

「有坂さん！聞こえる？」

声を限りに叫ぶ。

「どうしても話したいことがあるんだ！部屋に入れてくれないか？」

窓は開かない。沈黙したままだ。

その窓に向かって、さらに続ける。

「頼む！一度だけでいいんだ！そうしたら、もう来ないよ！」

沈黙は続いている。

「話を聞いてくれるまで、ここで待つてるから!」
黙ったままの窓に向かって、僕はそう叫んだ。

冬の日が暮れるのは早い。あたりはすでに濃紺に染められ、ちらほらと明かりがとり始めた。

僕はかじかんで感覚のなくなった手に息を吹きかける。

ふと、頬に冷たさを感じた。

見上げると、雪が降り始めていた。

コートに、髪に、次々と雪が積もっていく。

道路や屋根が、みるみる白く染まっていく。

あの雨の日に望んだ世界。

すべてが白く隠された世界。

そんな中、僕はずっと立ちつくしていた。

だめなんだろうか? もうこのまま、有坂は会ってくれないんだろ
うか?

そのとき、窓の開く小さな音が聞こえた。

有坂だ。

窓の外の僕を見て、ひどく驚いている。

何か声をかけようと思ったが、声が出ない。体の芯まで凍えてしま
ったようだ。

それでも何か言おうと、僕は必死で体を動かした。

彼女は涙を流していた。

「どうして、どうして…」

それだけを、有坂は繰り返す。まるで何かにとりつかれたように。
僕は声を出そうと躍起になって、やっと「ごめん、有坂」とだけ
いうことができた。

有坂の顔が引っ込んで、すぐに玄関のドアがあげられた。

玄関で雪を払ったあと、有坂の部屋に通される。

有坂は、ずっと泣き続けていたようだ。目の上が赤くなっている。
「ひどい顔してる」

僕はそういつて、ハンカチを差し出した。

有坂は受け取らない。ただうつむいて、僕と目を会わさないようにしている。

僕はそんな有坂に、できるだけ優しくいった。

「ありがと、有坂さん」

「どうして、」

有坂が声を絞り出す。

「どうして、お礼なんか言うの？ 私は自分のために、黒川君をあとに売っちゃったんだよ？なのに、なのにどうして……」

「テープのこと」

その声に、有坂が顔を上げた。

「警察の人が話してくれた。あのテープ、修復できたんだって」

「……そう」

「あのテープ、あのときに切ったんだね」

僕の言葉に、有坂がぴくんと反応する。

「あのときって？」

「有坂さんが、僕にテープを見せるすぐ前。僕の推理が終わったとき」

有坂は答えない。

「有坂さんがあのテープを見せたとき、途中で切れてたのがはっきりわかったから。最初からスイッチを入れてなければ、そもそも切る必要はないはずだよ。それが切ってあったってことは、少なくともどこかまでは録音してたことになる。なんでそんなことをするのか？」

沈黙する有坂の前で、僕はただ話し続ける。

「切ったということを、はっきりと見せつける必要があった。もち

ろん、高原達にね。こう考えると、ある答えがでてくる。つまり……」
言葉を一度きり、続ける。

「有坂さん、自分が犠牲になるつもりだったんじゃない？」

これが、僕があのときたどり着いた結論だった。

「あの程度の切り方なら、あとでどんな風にでも直せるだろう。だからあそこでテープを切ることであいつらを油断させた。でも、有坂は木田達の事件に関与してたわけだから、途中のあんなところで切ったら、もしあのテープが警察に見つかったときには、自分まで捕まることがわかってたはずだ。それなのに、有坂は切った」

実際、あいつらがあそこで殺し合わなければ、有坂は共犯として確実に捕まっていたはずだ。あそこで録音した内容には確かに有坂の計画を裏付けるものは何も無いが、高原達がそんな状況で有坂のことをしゃべらないわけがない。

「そうすると、答えはひとつだ。有坂……僕を助けようとしたんじゃない？自分を犠牲にして、僕を……」

「違う！私は本当に、黒川君を裏切ったの！あれだって……」

「他にどんな説明ができる？」

「……いろんな説明ができるよ」

そう言った有坂の声は、ひどく乾いていた。

「黒川君が死んでいれば、あんなテープは何の役にも立たないよ。どこかに隠して置いて、適当なときに処分すればいいだけだし。黒川君が勝ったときには、今度みたいに警察に差し出してもいい。いつまでも持っていて、里中さん達に脅しをかけてもいい。どっちにしても、私には損はないもの」

「それでも、結局は助けてくれた」

僕の反論に、有坂は言葉に詰まった。

「そ、それでも、私が黒川君をひどい目に遭わせたことは確かだ

し、テープのことだって、黒川君が勝ったときに私が有利な立場に立つためだし」

「じゃあ、僕がもう一つレコーダーを持っていたのは、何のため？」

僕の言葉に、有坂は声を失った。

「結局、僕も有坂さんと同じことをしてたんだ。有坂が気に病むことはないよ」

僕の言葉にも、有坂は首を振るばかりだ。

「それに、結局助けてくれたじゃないか。ほんとに僕をどうにかしたいなら、理科準備室から出たときに手伝わないだけでよかった。あのままだったらドアは破られてたし、僕は死んでただろう。でも、有坂さんは手伝ってくれた。あのままだったら、中のあいつらの証言で、有坂さんは捕まっちゃうのに」

そういつても、有坂はうつむいたままだ。

「わかってるの？私は黒川君を殺そうとしたんだよ？」

有坂の声に、僕は小さく、でもはっきりと答えた。

「誰かを殺そうとしたのは、別に有坂さんや里中達だけじゃないよ」

最終話 たいせつなもの

僕の言葉に、有坂ははっとしたようすで顔を上げた。

「気がついた？」

僕の言葉に、有坂は首を振る。

「そんな、まさか…」

「気がついたんだね？」

重ねて問うと、有坂はまた首を振った。

「詳しく推理した訳じゃないけど…一つ気にかかったことがあるの」

不安げな声で、有坂が問う。

「どうして黒川君は、理科準備室なんかにみんなを呼びだしたの？」

「どうしてだと思う？」

その質問に、有坂は目を伏せた。

「黒川君は、高原君達があんな行動にすることを知ってたんじゃない？」

「どうして？」

「黒川君、ナイフを出されてもぜんぜんおびえてなかったじゃない。それどころか、ドアに近いところに陣取って、私まで連れ出せるなんて。まるで、最初から知ってたみたいに。そう…」

有坂が、僕を見据えた。

「私たちが疑われたときの高原君達みたいに」

「有坂さんなら気づくかとは思ってたんだ」

ゆっくりと、僕は語り出す。

「その通り、僕は最初からああするつもりだったよ。もともと、

おいつめられたあいつらが暴発しやすいように、わざわざ人気のないところを選んだんだ。あいつらが、『黒川ひとりを消せば、あとはどうにでもなる』と思うようなところをね。だから、あいつらは武器を持ってきていた。それこそが、ねらいだったんだ。

だから、呼び出す場所は理科準備室じゃなきゃいけなかった。窓のない、外開きのドアの部屋。もともと狭くて、8人も入れればいっぱいになってしまうような部屋。そんな場所が、絶対に必要だったんだ。あいつらを閉じこめるためにはね。そして僕と有坂さんは、入り口のすぐ近くに陣取る。何かあったときに、すぐに逃げ出せるようにね」

凝視する有坂の前で、僕はしゃべり続ける。

「武器を持っていて、追いつめられて混乱していて、明かりもついていない。窓もない。狭くて自由に動くこともできない。そこをああやってあおられたらひとたまりもないだろうと思って。ああやって、思わせぶりなことをたくさんいつて、あいつらがつぶしあいをするようにしむけたんだ。ただ、あそこまでやるとは、さすがに思ってたなかった。せいぜい一人二人けがをするくらいだと思ってただけど」

「どうして、そんなことを？」

「日本の今の法律では、未成年者はよほどたくさん人を殺さないと、死刑にはできない。ということは、いずれあいつらは外へとでてくる。今までのあいつらの行動からして、そうなれば絶対に復讐されるよ。それを少しでも引き延ばそうと思ったんだけど」

それがどれぐらい甘いことだったのか、今では痛いほどわかる。

結局それが、さらに五人の命を失わせることになった。

結果として、それによって有坂の関与が明るみにすることはなかった。死人に口なしだ。僕は苦い気分で思った。

「有坂さん、これを聞いてどう思う？僕をひどいやつだと思う？」
僕の問いに、有坂は答えず、別のことを口にした。

「その前に、ひとつ聞きたいの。どうして、そんなことを教えてくれたの？証拠もないことだし、黙ってたらたぶん誰も気づかないまま終わってたと思うよ。なのに、どうして…」

「その理由はね…」

僕はかがみ込むと、有坂と唇を重ねた。

びつくりして声も出ない有坂を見ながら、僕ははつきりと言った。

「有坂さん、好きだよ」

「有坂さんの秘密のことは、誰にも話さないから安心して」

「…そのために、黒川君の計画を教えてくださいましたの？私の弱みをなくすために？」

「うん。確かにそれを使えば、有無をいわず好きなようにできたかもしれないけど、そんな有坂さんなんかほしくないよ。それじゃ、あいつらといっしょになっちゃうし。僕は、有坂さんを奴隷じゃなくて、恋人にしたいんだ」

ほんとは、わかってる。

ここで僕の手の内をあかしたところで、僕が有坂と一緒に心中する気になったら。こんな秘密など、紙切れ一枚の価値もない。

けれど、あえて手の内をあかしたことで、僕が有坂を裏切ることはないと、信じてもらえるだろうと、僕は確信していた。

…そしてそのことを、有坂は恩に思うだろう。そして有坂は、僕の告白を断ることはできなくなってしまう。

僕にはそこまでわかっていた。でも、他にどうすることができただろう？せめて、彼女がこれを恩にも負担にも、脅しにも感じないように、できるだけ軽くするしかなかった。

有坂が、口を開いた。

「だめ。わたしにはできないよ」

「準備室でのことなら、あんまり気にしてないよ」

「どうして？」

「あのときは結局助けてくれた。計画では有坂さんにもドアを閉めてもらうつもりだったけど、あんなことになったから、手伝ってもらえないと思ったんだ。僕一人じゃ、あのドアを閉めることは無理だったしね。けど、有坂さんは手伝ってくれた。それに…」

あのときのこと。屋上からの帰りの時の「

納得のいかない様子の有坂に、説明する。

「あんなことをしたら、有坂さんが怒るのわかってたはずなのにね」

「だから、いいんだ。結局何事もなかったし、有坂さんは自分を犠牲にしてまで僕を助けようとしてくれた。それでいいじゃない」

「黒川君…！」

有坂の涙は止まらない。

「黒川君、ばかだよ。ほんと、ばかだよ…。黒川君は、私に殺されかかったんだよ、わかってる？ 私にだまされて、ひどいめにあったんだよ、わかってる？なのに、なのに…」

「最初に裏切ったのも僕だし、あの場所でも僕は裏切ってるんだ。許してもらうのは僕の方だよ」

「どうして、そこまで私なんかに？」

「有坂さんに最初に許してもらったときに、決めたんだ。どんなことがあっても、有坂さんを守るってね。」

あの公園で許してもらった恩は、たぶん一生かかっても返せないだろうけど。でも、あの時から…いや、最初に屋上で有坂と会ったときから。あの場所にいてもいいって、有坂さんが言ってくれたあの時から。

僕は有坂さんが好きだった。どんなことをしても、守りたいと思
った。

うまくできたかどうか、自信はないけど……」

「だめだよ、わたしなんか……」

「それがいやなんだよ」

「？」

「僕たちがいじめられたのは、何度もすれ違って、お互いを罅に落
としたのは、自分に自信がないからだよ。自分さえ我慢すれば、相
手を助けられる。それしかしてあげられることはないから。そう思
いこんで、何度も何度もお互いを傷つけた。

もう、おわりにしよう？自分にも、みんなにも、この世のすべて
にびくびくして暮らすのは。

そのために助けがいるのなら。杖になってあげるから。自分で立
ち上がる気がありさえすれば、手を引いてあげられるから。

だから……一緒に行こう？」

そういつて手を差し出す。

彼女は、その手をじっと見て、おずおずと手を取った。

僕がその手を強く握り返して、手を引くと。

目の前に有坂の唇があった。

声を上げるまもなく、僕の唇に有坂のそれが押しつけられる。

驚いて声も出ない僕に、有坂は少し恥ずかしそうに、

「私からするのは、初めてだね」

「……うん」

「ありがと、黒川君。ほんとに、ありがと。どんな人だってこれ
以上のことはできなかったよ」

そこまではめられると、なんだか照れくさい。

「でもね……黒川君も、まだ立っただけばかりじゃない。ふらふらし

てるよ」

思わず、顔が赤くなる。

「黒川君が倒れそうになったら、私が杖になるから。今度はちゃんと、支えるから。」

守ってもらっただけなんて、嫌だよ。前も言っただよね…、黒川君は、私が守ってあげるって。前は守れなかったけど、今度こそ」

胸が詰まった。

「ありがと…」

それしか、言葉が出てこない。

有坂が、また泣いている。でも、こんどは、笑った顔のまま。

僕が見たかった、有坂の笑顔が、そこにはあった。

これまで彼女が忘れていた、心からの笑顔が。

Fin .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8970p/>

冬の話

2011年1月9日17時01分発行